

地域交流研究

2015年度

年報第12号

目 次

— 第11回地域交流研究フォーラム —

「地域交流研究活動 — SAT活動をふり返って —」

開会の挨拶と趣旨説明	地域交流研究センター長 鳥原正敏	3
第一部 SATのはじまりと変遷	佐藤 隆 (初等教育学科教授)	5
	杉本光司 (元地域交流研究センター長)	
	勝俣武男 (元キャリアサポートセンターSAT担当)	
第二部 SATの現状報告と今後の可能性	亀田孝夫 (教職支援センター特任講師)	17
	宮下 聡 (教職支援センター特任教授)	
	山崎隆夫 (教職支援センター特任教授)	

— 2015 (平成27年度) 年度活動報告 —

I. 2015年度の活動について〔概況〕		32
II. 各部門の活動		35
II-1. フィールド・ミュージアム部門		
II-2. 発達援助部門		
II-2-1. SAT事業		
II-2-2. 地域教育相談室		
II-2-3. 地域情報教育		
II-2-4. 地域美術教育		
II-2-5. 地域特別支援教育		
II-3. 暮らしと仕事部門		
III. インターフェイスとメディアの活動		54
III-1. 第11回地域交流研究フォーラム		
III-2. 各種講座の開催		
(1) 都留文科大学現職教員教育講座		
(2) 都留文科大学子ども公開講座		
(3) 県民コミュニティーカレッジ講座		
III-3. 『地域交流センター通信』の発行〔第27号〕		
III-4. 学部共通科目の開講		
(1) 「地域交流研究Ⅰ」—地域交流から得た知見を普遍化するためには どうすればよいか?—		
(2) 「地域交流研究Ⅱ」—生きもの地図をつくる—		
(3) 「地域交流研究Ⅲ」—「山梨」を知り、歩き、 その中から自分の課題を見つける—		
(4) 「地域交流研究Ⅳ」—地域の交流誌をつくる—		
IV. 地域貢献活動		64
IV-1. 山梨県南都留地域教育フォーラム		
IV-2. 都留市放課後子ども教室事業		
IV-3. 文大ボランティアひろば		
IV-4. 地域交流研究センターサテライト		
IV-5. 文大名画座		
IV-6. 学級づくりの向上をめざす実践講座		
V. 地域交流研究教育プロジェクト		74
V-1. 田んぼクラブ		
V-2. 食育つる推進プラン		
V-3. 都留市十日市場・夏狩地区における桂川を中心とした水環境の経年変化の把握		

第11回 地域交流研究フォーラム

『地域交流研究活動

— SAT活動をふり返って —』

2015年12月12日

都留文科大学

第 11 回地域交流研究フォーラム



都留文科大学

地域交流研究活動 —SAT 活動をふり返って—

第 11 回地域交流研究フォーラムは、SAT 活動を振り返りつつ、改めてその概念と意義について確認するとともに、地域の方々と本学関係者が、共にこれまでの成果と今後の可能性について共有することを目的としています。

SAT (学生アシスタント・ティーチャー) とは・・・

学生を学校に派遣し、「学習支援」と、「学力不振」「不登校傾向」「障害」等による困難をもつ子どもへの個別的な支援を体験させることによって、重層的な「子ども体験」にもとづく実践的指導力を持つ教員養成の深化・発展をはかるものであり、こういった活動の総称です。またこれは本学独自の発想による活動です。

日時

平成 27 年 12 月 12 日 (土)
午後 1 時～午後 3 時

**入場
無料**

会場

都留文科大学
2102 教室 (2 号館 1 階)

申込

- ① 大学ホームページの専用ページから申し込む。 →
- ② 下記の問合せ先に電話で申し込む。



問合せ先

都留文科大学 地域交流研究センター
☎0554 (43) 4341 (内線441)
対応時間は、平日9:00～16:30
Mail:ckouryu@tsuru.ac.jp

地域交流研究センターサテライト
(まちづくり交流センター内)

☎0554 (43) 1451
対応時間は、火～金9:00～16:30

開会の挨拶と趣旨説明

地域交流研究センター長 鳥原正敏

田中正樹 (経営企画課課長補佐)

これより第11回地域交流研究フォーラム「地域交流研究活動～SAT (サット) 活動をふり返って～」を開催いたします。開会に際し地域交流研究センター長より、ごあいさつと本フォーラムの趣旨についてご説明いたします。

鳥原正敏 (初等教育学科教授、地域交流研究センター長)

こんにちは。地域交流研究センター長の鳥原です。どうぞよろしく申し上げます。年末のお忙しい時期にもかかわらず、多くの方に来ていただきました、誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。SAT活動は本年度、おおきな節目を迎えています。これを踏まえ、本フォーラムではSAT (=学生アシスタントティーチャー) を扱うこととなりました。



今日のフォーラムの趣旨と進行について簡単にご説明させていただきます。まず、SATのあらましについてご説明させていただきます。そのあと本フォーラムの二つのねらいについて簡単に説明したいと思います。そして最後に、本フォーラムの進行についてご説明します。

SAT活動については、これはもう今日来ていただいた方々は何らかの形で関わっておられるので、それぞれのご理解があらうかと思いますがそれをもとに、お互いのイメージを共有すべく、確認していききたいと思います。

「SAT」という制度ですが、これは学生を現場の学校に派遣し、実践的指導力を持つこと、もう一つは教員養成の深化・発展を図る、こういったことを目標にした活動です。またこれは本学独自の発想による活動であると、これに関わられた先輩方からは聞いております。

我々地域交流研究センターでは、平成17年度よりこの活動を事業のひとつとして支えてまいりました。そして平成22年度より、このSAT活動をベースにした教職科目、「教職実践演習」や、「学校参加」といった科目群が設定されました。その後、平成26年度に教職支援センターが設置されたことを機会に、徐々にSAT活動や教職実践演習といった活動を、教職支援センターに移管してまいりました。

来年度になりますが、平成28年度からは、SAT活動、教職実践演習などの活動をすべて、地域交流研究センターから教職支援センターに移管する予定になっています。

本フォーラムのねらいは二つあります。一つ目のねらいは、これまでのSAT活動を振り返りつつ、改めてその概念や意義について、また「SAT」、「教職実践演習」、「学校参加」などの言葉について整理・確認し、皆さんと共有したいと考えています。もう一つのねらいは、地域の方々と本学の関係者が、これまでの「SAT」の成果や今後の可能性について確認しながら共有したいと考えております。

では、本フォーラムの流れについてご説明いたします。

本フォーラムは二部構成になっています。第一部では、これまでのSATについて、本学初等教育学科教授の佐藤隆先生と、情報センター教授であり私の前々任者になりますが、元地域交流研究センター長の杉本先生にご説明をいただきます。そのあと、少し時間をとりまして、佐藤先生とともに、今日来ていただいております、黎明期に多大なご尽力を頂きました勝俣先生にお話を伺いたいと思っております。

そのあと10分ほど休憩を挟みまして、第二部に移ります。第二部では、SATの今、現状について、教職支援センター特任講師の亀田先生よりご報告をいただきます。また、そのあと教職支援センターの関係の先生方と、会場の皆様を交えまして、現在のSATの様子やイメージについて触れたいと考えております、どうぞよろしく申し上げます。

最後に一つお願いがあります。まずはこのフォーラムの内容を、テープ起こしをしたいと考えています。SATについて言語化し、意義や経緯を教職支援センターに申し送りしたい、という発想でテープ起こしをさせていただきたいと思います。それと同時に、今日会場で撮影させていただく写真についても、本学のホームページや印刷物に使うことをご了解いただきたいと思います。以上、私からのご挨拶を兼ねて、本日フォーラムの流れとねらいについてご説明させていただきました。では早速、第一部に移りたいと思います。ここでは佐藤先生と杉本先生から、これまでの様子を中心にご説明をいただきます。では佐藤先生よろしく申し上げます。

第一部 SATのはじまりと変遷

初等教育学科教授 佐藤 隆
元地域交流研究センター長 杉本 光司
元キャリアサポートセンターSAT担当 勝保 武男

佐藤 隆 (初等教育学科教授)

こんにちは。佐藤隆と申します。

いろいろこれまでお世話になってきた先生もいらっしゃいますけれども、今お話しさせていただくのは、このSATというものがどのように始まったのか、その後、どのように発展してきたのかということについて、20分程度のお時間を頂いてお話をさせていただきたいと思います。

「SAT」という言葉は、知らない方はまったく分からない、「なんだろそれ」という、何かアメリカの狙撃部隊か何かかと…。最初はこの言葉を使うのが嫌だったのですが、「学生アシスタントティーチャー」の頭文字をとって「SAT」という風になりました。ではSATの初めはどういうことであったのかについてお話ししたいと思います。

本学では、従来から学部教育において、特に初等教育学科を中心にして、教科教育を担う、そういう力をつけた学生を養成していくという、教員養成での柱というものがございました。それはそれで大事なことです。一方で、1990年代の終わりから2000年にかけてさまざまな教育問題、「いじめ」ですとか、あるいは「荒れ」ですとか、それから「学力」の問題など、各教科の中だけには納まらないような教育問題、しかもそれが社会問題化していく、そういう状況に対して、教員がどのように対応していったらいいのか、ということについての問題意識とが、徐々に醸成されていきました。で、そういう課題に応えるような研究と実践の開発、これがこの大学の教員養成にとっても非常に大事なことであったと考えていたわけです。

ちょうどそのような時期に、文部科学省が「放課後学習チューター」という試行的な事業を始めることになり、都留市がその「放課後学習チューター事業」に対して応募をすることになりました。そしてこれを受けて、大学からこういった活動に参加する学生を派遣してほしいというお話がありました。ですから、ある意味では大学は、最初は受け身で始まった事業であったのですが、しかしその取り組みの中で、市内の小学校、中学校それぞれ一つずつと、都留市の教育委員会、そして私たち大学が共同して取り組んだものが「放課後学習チューター事業」でした。この取り組みの中で学生は放課後、小グループの中で学習支援や、困難を抱えた生徒のパートナー、広い意味での相談活動や、部活のサポートを行っていきました。こういった前史があり、それをさらに発展させていこうとなったのが、このSAT活動です。

今日お配りしたこの『地域を基盤とした教員養成教育モデルの開発』という冊子ですが、この1ページのところからご覧いただければ、私の話がわかりやすくなると思います。今お話ししたように、もともとこのSAT活動というのは、放課後学習支援、放課後学習チューターというものを原型にしていたのですが、2005年に都留市と本学の単独の事業として、さらにそれを



【表1】SATの活動参加学生および対象学校の推移

① 2005年度（SAT事業初年度）

タイプ 学校	A 前期	A 後期	B
小学校			
東桂	47名		5名
禾生第一	12名	12名	5名
中学校			
都留第一	6名		3名
都留第二	11名		
東桂	17名		5名
合 計	105名		18名

② 2006年度（SAT事業2年目）

タイプ 学校	A 前期	A 後期	B
小学校			
谷村第一	14名	10名	3名
谷村第二	7名	2名	1名
東桂	15名	15名	6名
禾生第一	12名	12名	4名
禾生第二			2名
宝			4名
旭			1名
附属			1名
中学校			
都留第一	5名	2名	3名
都留第二	2名	1名	
東桂	13名	11名	2名
合 計	121名		27名

は、全国的に見ても稀有な存在だと思います。

話を戻しますが、ちょうどその頃、大学院に臨床教育実践学専攻を立ち上げ、また学部にも臨床教育学専攻をつくるなどして、最初に言ったような問題意識、単に授業ができればいいというだけではなくて、子どもをトータルに理解し、そして、そこから学習指導を考えていく、そのような学部教育、大学院教育をしていこうという機運が高まってきました。これもやはり放課後学習支援、SATの活動が一定の見通しを持たせてくれたと言ってもいいかと思います。

次に、放課後学習チューターから、先ほどお話しした文部科学省の事業から、主体的に私たちがSAT活動を行うといったことに、どのようなことを期待してこのSAT活動を始めたのか、ということについてお話をいたします。

4 ページのところをご覧ください。放課後学習チューターについては、対象校となった東桂小学校、東桂中学校からこの事業の継続が強く望まれ、そのほかの都留市内の各小・中学校からも注目を集めました。そこで、本学と都留市教育委員会は、2005年に「学生アシスタントティーチャープログラム」を立ち上げたわけです。

そこでの目的はこのようなものです。一つは、児童生徒への支援と学生への教育効果を狙ったもの。ここに書いてあるとおり、学生アシスタントティーチャーによる放課後学習支援や、

バージョンアップさせていくという形をとって、学生アシスタントティーチャープログラム、これはSATと呼ばれているものですが、これを立ち上げて、内容的にもより一層充実を目指すことにしました。

2005年のその時の状況は、5ページのところに表でまとめてあります。5ページ6ページ（左資料）のところにありますが、初年度から100名を超える学生たちが、いくつかの小学校中学校に関わるようになっていきます。このように、最初からこれだけの数の学生たちが、いくつかの学校にお世話になるということが出来る、その背景にはやはり、以前から都留市教育委員会とこの大学が教育実習を中心とした連絡協議会を持っていて、お互いの意思疎通を意識的に行ってきたというような背景があるからだと思いますが、そういう意味では、条件に恵まれていたと思います。

今ではかなりたくさんさんの大学がいろいろな小学校、中学校に、サポーターや研修というような形で学生を送り出していますが、「都留市」という地域にこだわって、都留市の教育委員会と大学が共同で作業をする、というか協働で運営をするというようなケースは、今でもそれほど多くはない。そういう意味で

困難を抱える児童生徒の個別的支援によって、小・中学校での子ども一人ひとりに応じた、きめ細やかな指導を充実させるとともに、これに参加した学生が、子どもの実態をリアルに把握することができる力を養うことを目的とする、というのが一つでした。二つめは、状況的にはかなり大変な状況が学校現場に生まれていたわけですから、そこにおいて対応できる力を開発していく。このことが教員養成の一つの筋道だと考え、これを二つめの目的の柱にいたしました。また、このSAT活動は、学生にとってみれば教育実習へのスムーズな移行、それから教職の意義の学習、これにも役立つと考えました。それから三つめは、順番は一、二、三となっておりますけれども、かなり強く意識されたこととして、教育現場への貢献ということでした。小・中学校におけるスクールカウンセラーの配置、あるいは特別支援教育の展開などと連動させながら、大学と小・中学校の協働を進めていこうというものでした。また、学生によるレポートあるいはポートフォリオ、そしていくつかのところで取り組まれましたケースカンファレンス、こういったものに現職教員の方たちと一緒に取り組むことによって、お互いに教育実践の完成の契機にしていくというようなことも考えました。

続いて、取り組みの特性ということですが、これはもうご存知の通り、SAT活動は当初二つのタイプに分かれていました。「Aタイプ」「Bタイプ」と呼ばれていたものです。今でも「Aタイプ」「Bタイプ」はありますが、当時の「Aタイプ」というのは現在の「Aタイプ」と同じように、放課後の学習支援に当たるというものでした。それから「Bタイプ」というものは、実は現在の「Cタイプ」と言われているものです。つまり個別の児童、問題を抱えているそういう子どもに特定の学生が張り付いて、そしてその学生と大学がいつも連絡を取り合う形で、この子をどのように見ていくのか、というようなことについて活動を行うという「Bタイプ」、この二つの活動があったわけです。で、この二つのタイプの活動を体験させることを軸として、これらを円滑に運営するための体制作りがさらに必要になってきたということがあります。それが「都留市SAT運営委員会」になっていくわけです。このことについては、6ページのところにございます。今ちょっと名前が変わって「SAT運営委員会」になっていますが、当時は「SAT運営協議会」と名付けようという話もありました。先ほども言いましたように都留市教育委員会と都留文科大学、つまり、一つの行政単位である教育委員会と地域にある一つの大学が、そしてまた市内にあるすべての学校が協力連携体制をとる、こういった環境で、学生が学校へ派遣されるという活動は、おそらく全国的に見てもかなり少ない、ここに一つの大きな特色があったわけです。これに「都留市SAT運営委員会」が果たした役割は大変大きなものだったと思います。

この「SAT運営委員会」では、毎年「春と冬」って言いますか、あまり時期を置かずに1年間の総括と、その次の年の計画を立てることで、SAT活動が円滑に運営できるように準備をされてきました。そしてその中では、各学校のSAT担当者、それから校長先生、大学のSAT運営委員、さらに都留市の教育委員会が、それこそ率直に、こういう問題が出てきたとか、あるいはこの活動によって、学校がこういった元気をもらった、というような話題が出し合われて、また次の年もやろう、というような、そういう、元気をもらおうという会になっていったように思います。もちろん、いろいろ難しい問題は何度も話題に出されました。先生方の忙しさの中で、「学生がいろいろ相談したいと思っても、なかなかお話を聞く時間を持ってない」ですとか、あるいは、「ちゃんと責任を持ってやってくれない学生がいる」、など学校側からの問題提起もありました。勝手に休んでしまう学生もいました。しかし、全体としてみると、今の都

留市の小・中学校の現状を共有し、また一方で大学にいる学生たちの、今の若者たちの状況と
いうのをお互いに共有しあうという、非常に有意義な場所になっていったように思います。そ
の中で、都留市の教育をどのようにしていこうか、あるいは日本の教育全体を見ながら、大学
教育をどうしていこうか、というヒントをそれぞれが得たように感じています。

で、その申し合わせの中身については、すごく機械的ではありますが、後ろのほうの、資料
4ですかね、かなり後ろのほうですが、どんなことが話し合わせ、どんなことが結果として決
まっていったかということについて、71ページから始まる資料でかなり確認できるかと思
います。平成19年度のSAT計画書、それから20年度のSAT計画書、21年度のSAT計画書、3年
分計画書があります。これをご覧いただいでご理解いただけるとは思います、本当にたくさ
んの学生が都留市全域に散らばっていった様子をご覧いただけるかと思えます。そして、そのか
なりあとですが、例えば89ページにあります、平成20年度の成果と課題、それぞれの学校
から、成果はこれであり、課題はこうであった、というようなことが学校ごとに記録されてい
ます。

全体的には、各学校は学生を非常に好意的に見てくださっていた、それから、ご家庭も好意
的に見てくださっていたと言えると思いますし、また学生のほうも、教育実習ではなかなか体
験できないこと、教育実習の場合には、多くの学生は授業について、教材研究や授業の進め方
などについて学んで、そしてそれを研究授業という形で発揮するというところにかなりの力が置
かれるわけですが、このSAT活動は、その側面はもちろんありますが、それ以上にふだんの子
どもの生活といいますか、それがより近くで見える、そういう意味では、もう一つの子ども体
験と言うことができる。そういう場所になっていて、それが教育実習から帰ってきた学生にと
ってみると、子どもたちのこういう側面もあるのか、ということが改めて理解される。

実習に行く前の学生にとってみると、教育実習では、やはり授業のことで頭がいっぱいなわ
けですが、その授業を進める上で、こういう子どもたちがいるんだ、ということを知ることが
できる。そういう機会として、SAT活動があったんだということが、今から思うとよくわかり
ます。学生たちの感想などにも、そういうことがかなり多く見られました。そういう意味で
は、学校にとっても、そして学生にとっても、また大学にとっても、おたがいに連絡を取り合
わなければわからなかったような出来事や、それから考えというものに触れることができた
と、そういう意味では、大変だったけれどもなかなか大事な活動であったのかなということ
を、今思うとですね、思い出されます。

それで、こういう活動を踏まえながら、現在大学ではこのSAT活動を単位化、単位として、
授業として行うようになりました。途中までは、この活動に参加しても単位は出ないよ、とい
うものですが、それが「学校参加」という科目として授業となり、そしてその後、文部科学
省の法令変更によって「教職実践演習」という科目を設けなければならなくなった、という経
過の中で、「教職実践演習」にもこのSAT活動を使う、ということになり、今までは、大学の
授業というよりはある種のボランティア、参加したい人が参加するというようなものであった
ものが、「学校参加」そして「教職実践演習」という、教職科目の中に組み込まれることにな
ったということです。それが今こういう形で続いているというのが現状です。このような変化
が生まれたことの一つの理由は、平成21年までのSAT活動の中で、大学も、それから学生も、
かなり多くのことをこの活動を通して学ぶことができた。そして都留市の教育委員会、並びに
小・中学校の先生方の協力を得ながら運営するということについて、自信を持てるようになっ

てきたということが大きいのではないかと思います。

そろそろ終わらなければなりません、私は、この活動を行った一人として思うのは、もしもこのSAT活動がなければ、都留文科大学の教員養成の在り方は、今とはかなり違うものになっていたのではないかと思います。活動自体は、それぞれ2単位という小さなものですが、多くの学生がこれを体験することによって、いわゆる「座学」と呼ばれるような教職科目の中でも、子どもの姿を思い浮かべ、そして先生方の苦労を思い浮かべながら授業を受けることができる。そういう意味では、かたち自体はそれほど大きく変わったわけではないのですが、授業を受ける学生たちの変化というものが、この活動を通して生まれてきたように感じています。雑駁ですが、まずは簡単にお話を申し上げました。ありがとうございました。

鳥 原

佐藤先生ありがとうございました。では、これに続きまして、元地域交流研究センター長の杉本先生から、SATの黎明期から「教職実践演習」に至るまでの様子についてお話していただきたく思います。

杉本光司（情報センター教授、元地域交流研究センター長）

こんにちは、杉本です。只今、佐藤先生から当初のころの経過を説明していただきましたけれども、その一方で、先ほどちょっと触れられていましたが、現在の状況を作ってみましたので、この資料を使って説明させていただきます。



SATプログラム、科目『学校参加』・『教職実践演習』の状況（平成27年度）

平成27年12月12日（土）

分類	『学校参加』		『教職実践演習』		
	SAT (Students Assistant Teacher) プログラム				
プログラム	SAT (Students Assistant Teacher) プログラム		講義プログラム		
科目名	『学校参加Ⅰ』	『学校参加Ⅱ』	教職実践演習（学校参加型）	教職実践演習（臨床教育型）	教職実践演習（教育研究型）
年次	3年		4年		4年
クラス数	A～K（11クラス）	A～K（11クラス）	初等（8クラス）、中等（3クラス）	初等（2クラス）	初等（2クラス）、中等（3クラス）
クラス	A：谷一小	A：谷一小	初等 A：谷一小	A	初等 A
	B：谷二小	B：谷二小	初等 B：谷二小	B	初等 B
	C：附属小	C：附属小	初等 C：附属小		中等 A
	D：東桂小	D：東桂小	初等 D：東桂小		中等 B
	E：禾生第一小	E：禾生第一小	初等 E：禾生第一小		中等 C
	F：禾生第二小	F：禾生第二小	初等 F：禾生第二小		
	G：宝小	G：宝小	初等 G：宝小		
	H：旭小	H：旭小	初等 H：旭小		
	I：都留一中	I：都留一中	中等 A：都留一中		
	J：都留二中	J：都留二中	中等 B：都留二中		
	K：東桂中	K：東桂中	中等 C：東桂中		
	それぞれのクラス(学校)にAタイプ（放課後活動）とBタイプ（授業中活動）がある		Cタイプ	学内においての授業	

まず、「学校参加」という科目のことです。「学校参加Ⅰ」と「学校参加Ⅱ」という2科目あります。「学校参加Ⅰ」は対象が3年で、「学校参加Ⅱ」のほうは2年ということで、後期に開講されています。もちろん「学校参加Ⅰ」は前期開講です。この他に、先程説明のありました「教職実践演習」の学校参加型というのがこちらにあり、更に臨床教育型のSAT-Cタイ

プと呼ばれるものが2クラスあります。これらのタイプ以外の「教職実践演習」ですが、小・中学校に行くことなく、学内において座学としての授業を展開しようということで5クラス開講しており、初等向けに2クラス、中等向けとして3クラスです。こういう現状ですので、ひとりで「教職実践演習」と呼ばれても、これが学校参加型なのか、臨床教育型か、学内での教育研究型かという、3つのタイプに分かれてちょっと複雑になっていますが、先ず、これを是非頭に入れていただいて、「学校参加」と「教職実践演習」の関係というものを理解して頂きたいと思います。

そもそも「教職実践演習」という科目ですが、4年次の後期に配当されています。これは文部科学省の思惑もあると思います。たぶん、本音は、ただ教職免許を取りたいだけという4年生をそこで落としてしまいたいという思いがちょっとあるんじゃないかなと、ずっと感じています。どうして4年の後期に開講しなければいけないのかという疑問です。4年生の後期はとても複雑な事情の時期なんです。たとえば、教員採用試験に合格している学生と、受からなかった学生が同居する時期、そういう時期にこの科目「教職実践演習」を開講するという意義はとても深いということですが、そのあたりでどのようにしていこうかということで、様々なことを本学でも考えておりました。その状況の中で、先程佐藤先生から説明のありましたGP*の時に少し並行する部分や時期がありましたが、文部科学省から「教員養成改革モデル事業」という取り組みに関する募集があり、そちらに応募、採択されたという関係から、私が担当させてもらいました。この取り組みの中で、教職教科の講義科目とか、その時には科目「教職実践演習」は仮称でしたが、4年間、正しくは4年の前期までに、いろいろ身につけたスキル、それを「教職実践演習」の中で自分を振り返っていく、そして、そこで足りない知識やスキルを補って卒業していこうということが位置づけられました。この取り組みに関しましては、初等教育学科はGPのほうでサポートしていただきましたので、それ以外の国文、英文、社会学科で教職課程を受講の学生に限って、お手元の資料「平成19年度教員養成改革モデル事業について」というA4の冊子が配布されていると思いますが、この資料のアンケートの状況に記載したとおり、特に「教育実習」を通して強く感じたことの中で、教材作成とか指導案に不安や不足があったとか、授業の進め方が難しかったとかというように、学校のところの教材の部分に、非常に大きな不安を持っていると答えている学生の数が目立ちます。

そして、それ以外に、自分が受講した科目に関してですが、こちら画面の表を見ていただけますか。お手元の資料にも用意されていますけれども、この二重丸のついた科目は、自分が受講して役に立ったかどうかという結果です。「教育心理学」が38名でいちばん多く、「教科教育法」については34名、これは国文、英文、社会の学生なのでこういう数値が出てきます。一方で、丸のついた科目ですが、こちらは受講しなかったけれども、教育実習とかいろいろ経験した中で、どういう科目をもっと勉強すればよかったかなという思いが現れています。この中で、「学校参加」に関して、SATのタイプについても、自分も受講してみたかった、受講すればよかったというのは4年次に調査した段階でも出ていました。そして、それ以外にも「教育心理学」とか心理学関係のところに集中して「受ければよかった」という数値が出ています。

このアンケートを実施した中から、数名のモデル事業協力対象者を決定しました。この学生たちに協力してもらい、ポートフォリオを作るところまで行うという一連の作業をしました

* 19年に採択された、特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)：学生アシスタント・ティーチャー・プログラム～学習支援を通して「子ども体験」の深化をめざす～

が、その中で、現在にも引き続いて継続されている項目ですけれど、学生たちは自分の学んだ授業の成果、それから教育実習とかいろいろな取り組みの中から自分たちを見つめなおすということ。その後、将来に向かってどういう知識が必要なのかということで、「教職実践演習」が開講されていきますが、こういう中で、今後は、さらに「ポートフォリオ」と呼ばれるものを活用することで、入学してから4年次までに、どんな自分の履歴が残せるのか、それがどのようにして将来教職の現場に就いた時に活用できるのか、それに対して不安はないのか、あるのか等について、各自が自己分析を行います。そして、それに対して残りの期間でどのようにサポートできるかどうか、そういう部分についても研究していくということで、いよいよ正規科目「教職実践演習」に引き継がれていくこととなります。この取り組みにおける課題として掲げている中で、特に3番目の「柔軟な対応ができる体制づくり」ということですが、本来は、10人いたら10人とも抱える状況や課題はみんな違うはずなんです。しかし、それを、一人ひとり用として各自専用のプログラムを用意するわけにはいきませんので、ある程度は類型化するということが必要だと思います。その結果、先ほど説明いたしました「教職実践演習」においても、学校参加タイプと学内で研修・座学的なタイプという、二つのパターンに分けていますが、その内の学校参加タイプはさらに細かく分けているというのが現状であり、また本学の大きな特長です。

本来ですと一人ひとりが全部違う課題を抱えているということに対して細やかな配慮をすること、200人近い教職志望の学生たちに対応することは非常に難しいことですが、そのような中においても、SAT活動を通して学校現場を体験することは、とても大切なことであるということをもとめとして提案しました。この「教員養成改革モデル事業」における成果発表以降、ちょうどその学校活動参加型のものを最初に積極的に取り組んだ大学として、都留文科大学と、上越教育大学がありました。それで、お互い様々な情報交換を行いながら、そういう取り組みにおける先進的な大学ということで、多くの大学からの先進視察訪問を受けたりしたことでちょっとアピールをしていった時期もありましたが、その基本的なものは、SATプログラムで積み上げてきた実績という、そういうところに位置していると思います。

ですから、先ほど佐藤隆先生からもお話がありましたけれども、都留市ならではの取り組みという、都留市が、小学校8校、中学校3校という11校の中で、本来、放課後だけだった活動が、さらに授業の支援にも参加するようになっていった。そういうようにしてどんどん広がっていく時に、柔軟な対応のできる体制づくりがとても大切なんじゃないかなということも提案してきておりました。柔軟な対応ということは、先ほど言ったように、個々に抱える問題がそれぞれ違うけれども、それに対して、ただ類型化することにより、あなたは違いますよということで切ってしまうのではなくて、本来だったらこの授業をもっと私は受けたかったと考え、「一部でもいいから授業に参加させて欲しい」とか、「部分的な聴講を認めて欲しい」とか、学内での授業に関することもありますし、また、SAT活動においても、「別な学校にも行ってみたい」、「小学校だけではなく中学校にも行ってみたい」などの要望が寄せられた時に、許される範囲内で行かせてもらえるという対応が可能となるような柔軟な体制づくりというのがとても大事なんじゃないかなと思っています。このような実践や研究の中から、科目「教職実践演習」にSAT活動が取り込まれましたが、これが現在まで引き続いております。しかし、社会環境の変化の中、今後はさらに細やかな配慮が必要だと考えます。

ここでまとめとして、もう一度、先程の一覧表に戻りますが、「学校参加」のⅠ・Ⅱという

授業。「教職実践演習」の中でSAT活動を行う学校参加型、臨床教育型と学内における座学による教育研究型。更にSAT活動を行うそれぞれの小・中学校には、放課後活動を行うAタイプ、授業中活動を行うBタイプ、そして臨床教育型のCタイプに分かれます。このA、B、Cの3つのタイプに分かれるという、ちょっと複雑に見えますが、この現状を理解して頂いた上で、今後、この取り組みの経過を見ていただければと思います。

SATのプログラムのスタート時から、「教職実践演習」に関わる、過渡期のお話ということで、説明させていただきました。ありがとうございます。

鳥 原

杉本先生ありがとうございました。佐藤先生からは、SATの黎明期と立ち上げの頃を中心に、お話を伺いました。また杉本先生からは、「教職実践演習」にSATがどのように関わっていったのかについてや、関係者の中でよく話題になる「言葉」について、ご説明いただきました。

では、続きましてSAT活動の黎明期に活動の立ち上げに中心的な役割を担われた、また大学の関係者というだけではなく、さまざまな形でご貢献いただいた勝俣先生に、当時の様子を伺いたいと思います。

この場では佐藤先生から当時のご苦労話、当時お感じになったことについてお話を伺いたいと思います。では佐藤先生よろしくお願いします。

佐 藤

みなさんご苦労様です。今二つ、ちょっと固い話が続きましたので、もう少し柔らかく、実際に活動しているとこんなことがあったよ、というようなことについて、一緒に活動して下さった勝俣先生と、当時を思い出してみたいなと思います。

勝俣先生という方については、多くの方がご存じかと思いますが、とにかく面白い方でした。初めてお会いしたのは東桂中学校の校長先生をされていた時でしたが、校長先生とは思えないと言ったらほかの校長先生に悪いのですが、若々しさというか柔軟さというか、発想の柔らかさといいますか、そういったものをすごく感じました。で、まあ学校参加、SATの活動の初期にもお手伝いいただいたのですが、結構長くお手伝いいただいていた、学校参加の授業が終わった後よく二人でお酒を飲みに行ったんですね。

よくお話を聞くと、とんでもない経歴の持ち主だということがわかったりもして、すごい人がいるもんだなと思いました。

で、今からお話ししていただくのは、最初に、当時東桂中学校の校長先生としていらっしゃって、そしてこちらの大学院が作られた2003年でしたかね、田中孝彦さん、今ではここにはいらっしゃいませんが。それから森博俊さん、もう退職されました。あるいは今もおられますが鈴木（武晴）さん、臨床教育実践学専攻のメンバーが中心となって、地元フィールドを作りたいということで、東桂中学校にお世話になって、まあSATの、ある意味では原型になっているようなところもあるかもしれません。そして、2005年には放課後学生チューターを引き受けてくださった学校の一つでもありました。

大学から現場に教員が、あるいは学生が出かけていくというのは、たぶん現場としては、当時は、本当に面倒くさいと感じられたんじゃないかと思いますが、しかし一方、積極的にそういう要請を引き受けてくださった、そのあたりのいきさつといいますか、その当時校長先生

をされていて、大学と関わるというようなことについて、どのような問題意識を持たれていたのか、というあたりからお話を伺いたいと思います。

勝俣武男（元東桂中学校長）

はい。えー、今、恥ずかしいぐらい褒めて紹介していただきました、勝俣武男と申します。今は、一家のおじいちゃんです。SATの導入について、私の教育に対する考え方から、まずお話ししたいと思います。



私は、まず学校教育法の目的に「一人ひとりの子どもの心身の発達に応じた」と、ここが一番大事なことだと考えていました。それから、昭和56年の社会教育の答申に、学社連携という、学校と社会との連携を今からするんだという、まあ社会教育の勉強を多少したというところと、それから、それ以後生涯学習で、学社融合、学校と社会が融合した教育をこれからはやると、今現実にやっていますが。それを、昭和61年頃から考えて、取り組んで30年間くらい。で、今とにかく、佐藤先生がおっしゃったように、社会がとにかく複雑で、学校で抱えきれない、こういう現実があるということです。

で、現場の谷村第一小学校へ戻ったのが平成元年です。谷村第一小学校は伝統のある小学校で、100年以上経っています。それで、平成元年に今のような考え方でぱっと事業を起しました。PTAの活性化のために、学校事務室というものを作って、いつでも誰でも学校へ来られると。教師をしながら、校長・教頭に働きかけてそういうことをやったり、それから勝山中学校では、社会事業の講師をどんどん取り入れた授業をやっていきました。で、教育事務所の社会教育主事をやっている頃には、お年寄り、おじいちゃんおばあちゃんが学校へきて「出番だよ」、そういう場面を作りました。

今日、市議員の小林健太さん、当時小学生で6年生くらいだったかな、学校開放というのをやったんですよ。

あの頃は怖くてねえ、学校へ来ちゃえみたいな、やたら人が学校に入ってきてしまって、対応の仕方はどうしたらいいか困っていました。都留市の小学区には、柵なんかないので、誰でも入ってこられる。だけど、やたら来られては困る、怖い。そこで、その対策として、逆に学校開放というのをやったんですよ。お父さん・お母さん・おじいちゃん・おばあちゃん、いつでも学校へ来てください。但し、印をつけてね。子どもの見守りをしてもらいたい、学校を理解してもらいたいと考えました。そこで、都留市教育委員会では何をしたかという、看板をかけた。あれ法律上ね、よくわかりませんが、私の駐車場へ無断で車を置くと1万円罰金とるぞ、っていう感じでね。勝手に学校に入らないように、という看板をかけた、それで後は対応しようと。私は逆に、どんどんお父さん・お母さん来てください、そのかわり印をつけて、というようなことをやったのを思い出します。

それから次は東桂中学校。佐藤先生が先ほど言ってくれたように、私はちょうど都留文科大学の同窓会長をやっていたんですよ、ここ出身だから。そうしたら森先生とか田中先生が、スクールカウンセラーをやっていただけということになり、大学から現場へ来て、スクールカウンセラーをしていただいた。そこで初めて校内研究で、子ども理解のカンファレンスという

のをやったんです。これはね、学校が非常に荒れていてやらざるを得なかった。それから問題を抱えた子が多すぎて。そういうことを学ぶ必要があった。

それで、その次の年ですね、文部科学省の先ほど言った「放課後学習チューター制度」というのをね、私の知り合いがちょうど研究員を担当していたので、彼が私に電話をくれて、指定校で受けてくれないかということをお訊かれました。都留市は貧乏だから予算がなく、文部科学省の指定に飛び付いて、あれが2～300万だったかなあ、それを当時都留市教育委員会と甲府市教育委員会を県が指定して、都留市のほうは、現場は小学校と中学校、東桂ですね、で、中学校はやたらやりたかった。ところがね、甲府のほうはあまりやりたがらないから、お金いらなかった。だから、私は100万以上頂けた。というのは、学生に時間給を支払いたかった。学生にとっても、現場に来て授業していれば薄謝ながら時間給をもらえる、こんないいことはない。それで田中先生や森先生にお話しして、教育相談的なこと、特に困っている不登校だとかね、障がいを持っているそういう子どもを中心に、学生に支援をしていただくことをやった。

最初はね、5人くらいしかいなかったけど、順々に増えていった。と同時にまた東桂中学校はね、アジアからの帰国子女が、毎年2～3人入ってくる、当時ね、都留文科大学には中国の留学生がいますね。で、留学生を来ていただけるように手配してもらって、一人ひとりとにかくきめ細かな指導を、特に教科というよりも生活、立場を補助する、そういうことを中心にした。それから教科ではね、英語ですね。あとは学校が荒れていましたから、授業へ参加できない、給食はかかれてとるなんていうような子がいましたので、そういう子どもには、英語で歌って踊って遊ぶと、こういうものを空き教室を使って、英文学科の学生に来てもらってやったんです。そうしたらね、最初は給食を食べに来る程度の子どもが、来るようになったんですよ。

そういうことが、まず放課後学習チューター制度では、放課後だけやればいい、そうじゃなくて昼間もやってもらった。また、部活動への補助もしていただいた。当時はお金が出せたからね、1時間当たりいくらだっけ、補助金をもらっていたから。まあ事務はちょっと大変でしたが。振り返ってみると、それが起源ですよ。それをやって、SATというの、指定校が終わって、それで都留文科大学と都留市教育委員会と11の学校で、SATについて共通理解をもちながら立ち上げたのがスタートかな、そのくらいでいいですかね。話が長くなるので、ここでいったん切ります。

佐藤

大変興味深い、今思い出すとそういうことがあったなあと思います。まだまだ聞いていたのですが、時間が少なくなってきましたので。もう二つ話題を用意していたのですが、一つ目は、最初、勝俣先生は迎え入れる側だったのですがその後、先生は大学のほうに関わってくださって、教師になりたい学生に対しての支援、教採対策も含めた支援や、それからSAT活動そのものにも関わっていただきました。先ほどは、とてもかっこいい言い方をさせていただきましたけれども、最初の頃は、なかなか大学の教員のほうも手伝ってくれなくて、勝俣先生と私が中心になって、あとは専攻科の学生ですとか、そういう人たちに手伝ってもらいながら、受ける学生はたくさんいたにも関わらず、こちら側にあまり人がいなかったりして大変な時期もあって、その頃は充分、学生たちの話を聞き取ることはできなかったのですが、しかし学生たち同士で、うまくいかないことの話をついばいして、そして課題のためにお互い相談をし合う、

そういった場面に立ち会っていました。そこで、今から先生に質問したいことは、そういった学生たち、SATの活動を通して見た学生たちというものを、当時どのように見ていたのか、そしてそういう学生たちが教師になっていく、そのためにさらにどんな援助が必要とお考えになったのか、これは今後の都留文科大学の在り方といいますか、教員養成の在り方にも関わる内容です、少し、5分から10分程度でお話しいただければと思います。

勝 俣

学生は、とにかく教育実習のみの体験、行った学生はね。行っていない学生は何もわからない。だから、とにかく現場の実情を、見て、驚いて、つまづくことがたくさんあるわけです。そういう体験ができるというか、実践の現実を知って、現場の厳しさがわかる。これが学生にとって一番大切なのではないのでしょうか。

まあ、ここでは大きな声で言えないのですが、さまざまな困難を抱えた家庭・家がある。そこから登校してくる子どもがいるという現実を知った。朝飯は食べてない、お父さんの都合や事情で転校しなきゃならないとか。またその鬱憤で非行をして、警察に補導されたとか、そういった実情を知った。不登校の子どももたくさんいること、教室に座ってられない子どももいる、その現場を知ったってことが学生にとってとてもよかったと思っています。そして、そこで迷う、私は教師として務まるのか、と心が揺れるんですね、学生は。そういう場面がよくありました。

一方逆に、ああ来てよかったと思うこと、子どもがさわやかなあいさつをしてくれてた、私はまだ学生なのに先生なんて言ってくれた、こういった場面もありました。それから、先生方が、朝早くから来て生徒を迎える、そういう姿を見たり、先生方のさわやかな会話なんかを見て、ああやっぱり教師になりたいと思う。こういったことを通して、よかったと感じる。SATを通して、自分の生き方を学び、人として成長していく、そういった様子が見られました。

佐 藤

その上で、これから教師になっていく学生を養成する大学に期待することと言いますか、こういうところをもっと頑張ってもらいたい、というようなことでも結構です、短くお話しいただければと思います。

勝 俣

短くね。じゃ結論を短く言います。昨日の新聞だったかな、中教審（中央教育審議会）の答申案、学校に福祉専門家を置き、教育支援が必要だということ、SSW（スクールソーシャルワーカー）を置く動き、貧困、虐待、福祉部門の支援が求められているといった内容の記事がありました。そういう現実を、都留文科大学の学生が、地域社会で生活している子どもの現実をまず知る、そういう現場体験、これが何よりも大事だと思います。またこういったことが日本の教育現場の教師に求められる、それが学生にとって一番大きな、大事なことです。

教科指導とか、もちろんそういうものを事前に学習することもものすごく大事ですが、教員になってからも、積み重ねてやっていけます。しかし、生活的な指導とかそういうようなものは、学校で現場を体験しながら、大学へ戻ってフィードバックというか、グループワークをしながらそこへ大学の教授がついてとか、そういう勉強をすることですね。現場の教師を交え

て、ケースワークというか、カンファレンスというような、そんなことを求めたいと思います。

佐藤

ありがとうございました。久しぶりにお会いして、とても元気な姿を拝見できて、さっき聞いたら、まだバイクで走っていると言っていましたけれども、いつまでもお元気でご活躍ください。それではこの部分について終わりたいと思います。

鳥原

佐藤先生、杉本先生、そして勝俣先生、ありがとうございました。これをもちまして第一部を終了といたします。では、第二部のご案内をさせていただきます。第二部は、午後2時20分から始めたいと思います。ではここで一旦休憩とさせていただきます。

第二部 SATの現状報告と今後の可能性

教職支援センター特任講師 亀田 孝 夫
教職支援センター特任教授 宮 下 聡 夫
教職支援センター特任教授 山 崎 隆 夫

鳥 原

これより第二部を始めたいと思います。第二部では、SATの現場の様子について、元都留市の小学校校長であり、現在教職支援センター特任講師、また現在のSAT活動の中心的な存在のお一人でもある亀田先生から、SATの現状についてご報告いただきたいと思います。では亀田先生よろしくお願ひします。

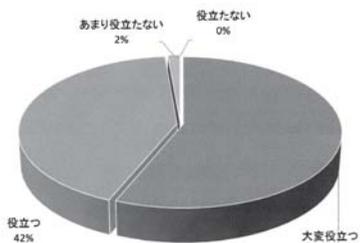
亀田孝夫（教職支援センター特任講師）

こんにちは。私は教職支援センターの亀田と申します。よろしくお願ひいたします。第一部ではSATの歴史、それから教職実践演習についてご説明していただきましたので、私のほうからは、教職実践演習におけるSATの現状について、お話をさせていただきます。

1. あなたは、SATは学校で仕事をする上で役立つと思いますか、

①SAT-A 71名回答（小学校59名、中学校12名）

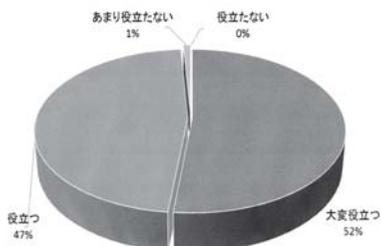
SATは、学校で仕事をする上で役立つか
平成26年度 SAT-A 71名



1. あなたは、SATは学校で仕事をする上で役立つと思いますか、

②SAT-B 116名回答（小学校75名、中学校41名）

SATは、学校で仕事をする上で役立つか
平成26年度 SAT-B 116名



資料の8ページ（左資料）をご覧ください。教職支援センターでは、昨年12月にSATに関する調査を行いました。

その調査で、SAT活動に参加した学生に、「あなたは、SATは学校で仕事をするうえで役立つと思いますか」と尋ねた質問で、小・中学校別の回答をグラフ化したものです。画面の数値は、それを小・中学校の回答を合計した数値です。都留市の小・中学校でSAT-Aの活動に参加した学生71名のうち、大変役立つと回答した学生が56パーセント、役立つと回答した学生が42パーセントで、98パーセントの学生が、SATは学校で仕事をする上で役立つと回答しています。SAT-Bの活動に参加した学生116名については、大変役立つと回答した学生が52パーセント、役立つと回答した学生が47パーセントで、99パーセントの学生が、SATは学校で仕事をする上で役立つと答えていることがわかりました。このように今回の調査から、SAT活動を経験したほぼすべての学生が、SATは学校で仕事をする上で役立つと答えていることが確認されました。

では、どのような点で役立つと思うのか、という質

問に対する回答ですが、これについては資料の13ページに掲載してあります。Aタイプを見ますと、「現場の雰囲気や現在の子どもたちと実際に接することができ、さまざまなことを体験できる」「実際に生徒と話すことで距離感や生徒の反応がつかみやすくなる」「実際の教育現場に立ち、子どもたちとのコミュニケーションや先生方と子どもの接し方、授業の進め方を見て、体験することができ、絶対に来年の即戦力になると考えるため。今のうちに教育の現状をみることができ、心の準備ができる」などの点で役立つと答えています。

Bタイプについては、「子どもたち一人一人の様子をじっくり見ることができ、担任の授業や子どもたちとの触れ合いを学べる。子どもたちに適した手だてや指導を考えることができた」「授業補助の立場として入ることで、子どもたちの学習の様子の現実を知ることができ、学力差がある。集中力を持続させる大変さなど」「生徒たちの様子や学校現場の様子が見られることが利点だった。また、教師同士がどのように連携しているか見ることができるといふ点も大変参考になり良い経験になった」などの点で役立つとしています。

次に、小・中学校でSATを担当する先生方の感想は、資料16ページにあります。まず、学生はSAT活動で貴校の教育活動にどのような面で貢献できましたか、という、貢献についての質問では、「学習面の個別指導で、子どもの気持ちに寄り添い、肯定的な認め方をしてくれるので、子どもの情緒安定にもつながった」「職員だけでは人手の足りない別室指導に何人も関わり、人間関係を築いていただき、該当生徒の学校生活の充実に直接貢献していただいた」「『今日、放課後SATはありますか』と、職員室にわざわざ確認に来る学生がいるなど、貢献という評価を遙かに超えた素晴らしい貢献をしている」というような評価をしていただきました。

次に、学生のSAT活動に取り組む様子はいかがでしたかという質問では、「年々意欲・態度が向上しているように感じる。年度当初は個々の児童や学級の様子がわからず、対応に戸惑う場面も感じられたが、慣れてくると担任の補助を積極的にしている」「個々の生徒の理解度に合わせて対応しようとしたり、不登校傾向の生徒に個別に対応したりしてくれた」と、高く評価していただいている一方、このような点について改善を要するというご指摘をいただきました。「SAT-Bは、学生によって取り組む姿勢への意欲の差が感じられた。机間巡視して積極的に生徒を支援しようとする学生もいれば、後ろで授業メモを取って終わってしまう学生もいたのが現状である」ということで、「生徒にとって有益になるよう、学校からも働きかけていくが、大学からもアプローチをお願いしたい」という回答が寄せられております。

先ほど、SATについて説明がありましたが、これまでSATにボランティアで参加している学生が、学校参加・教職実践演習という授業になって、教職実践演習のSATということになりました。これについてこれから説明していきます(次ページ資料参照)。どのようになったかという、学校現場の学生自身が行うSAT活動を個別に指導、教師力養成講座、学校別検討会で振り返りながら、学生同士で実践を交流させながら学んでいるという形です。

SATの様子について、これは実際の様子で、放課後のSAT-Aの様子(次ページ写真左)です。数人ずつの小グループの中で、こんなふうにして個別的に指導している状況です。それから、これがSAT-Bの授業の中で、個別的な指導をしているところ(次ページ写真右)の様子です。本年度のSATの学生数は、SAT-Aには小・中学校79名が関わっています、Bのほうは121名で、計200名が市内の小・中学校で活動させていただいているという状況です。

学生はSAT活動を行ったあと、その都度、学生はこういった「SAT活動の記録」というものをつけます。この活動について、担当された先生ですが、こちらから特にコメントを求めています。

SAT の区分と学内での指導

① 「ボランティア」

- ・ SAT 活動により、学校現場と子どもの状況を実地に体験する。

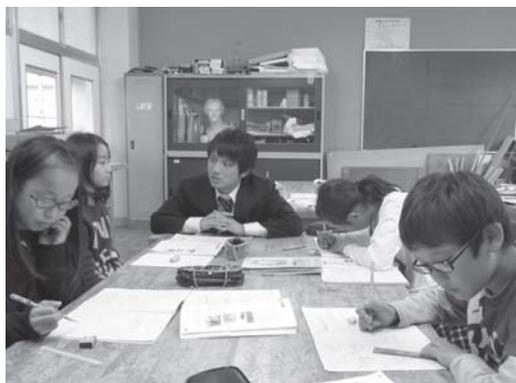
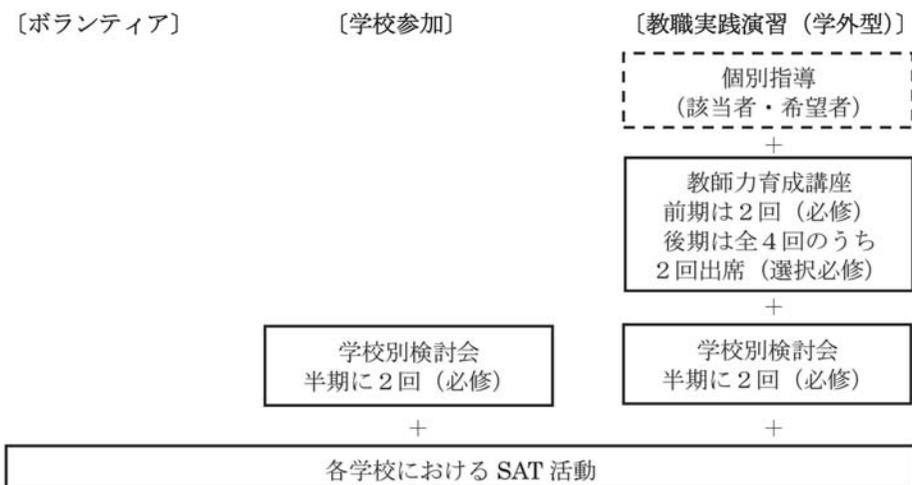
② 「学校参加」

- ・ SAT 活動を行いつつ、「学校別検討会」（半期 2 回）で学校現場での体験を反省的に検討し、教職に向けた課題を把握する。

③ 「教職実践演習」

- ・ 大学の教職科目・教科専門科目・演習・教育実習等で学んできたことを意識的に活用しながら SAT 活動に取り組み、教員として主体的に行動できる、学んできた技術を適切な場で用い工夫ができる、児童生徒と人間関係を学ぶことができるようになる、現場教師と協働できるなどを目的とする。
- ・ 学生が教師を目指す上での弱点の補強や反省的实践に向けた学習の深化のため、「教師力養成講座」へ参加する。
- ・ 「学校別検討会」で、SAT 活動で触れる学校現場の課題に即した話し合いを行い、「理論と実践の往還」を行う。

◎SAT の「ボランティア」、「学校参加」、「教職実践演習」区分図



るわけではないですが、自主的に赤ペンでこのように書いていただきましたので、ちょっとここで紹介させていただきました。

映像では、感想とありますが、実際の場面でどのように子どもに注意すればいいか、悩むことに対して、担任のほうからは、叱るタイミングとか、叱り方さえ間違っていなければ、子どもたちは納得し、従ってくれますよ、という助言を書けていただきました。1年間この学生はこちらの学校に関わったのですが、次に、楽しい中にも毅然とした態度、教師としての一線が大切であるということを書いていただきました。そして、教師の助言を受けてこの学生が休み時間、子どもたちと存分に触れ合ったことがここに書いてあります。また、男子だけではなく、女子とも積極的に触れ合うようにという助言を受けて、そのような活動を心掛けています。また、担任のほうからは、メリハリをつけて子どもとも存分に遊ぶということと、授業をしっかりと区別して取り組むようにということ、また算数の回答について、どのようにすればいいのかと書いて下さっているのですが、考えが合っていれば正解とするなどの助言が書かれています。これらの助言から、実際に学生が現場で子ども指導に関わって、悩んで、そしてどう解決していくか考えるうえで、知識ではなく本当の、教師としての力がついていくという様子が、この「活動の記録」を見ると伝わってきます。

次に、本年度の「教師力養成講座」の様子ですが、特徴としまして、これは資料の2ページに書いてありますが、前期後期2回ずつの学校別検討会、それから後期の学校別検討会には、市内小・中学校の先生方にも参加して助言をいただきました。また前期の講座には、現職の先生、それから保護者の方々とも語り合う場を作っていました。後期については、現場での仕事を理解していただくということで、教務主任の先生、研究主任の先生、生徒指導主任、生徒指導主事、養護教員の先生方にも大学に来ていただいて、現場の実践を学生に語っていただきました。



これは学校別検討会の様子です。SAT活動をしている市内11校の学校別に分かれて、写真(左写真)のように学生が活動を振り返って、また活動実践をお互いに交流し合って学べる構図になっています。

第2回の教師力養成講座では、市内小・中学校の先生方15名に来ていただき、実践に基づいたお話を伺いました。資料の4ページから、各講座の感想が列記してあります。この第2回での学生の感想ですが、こんなふう

書いてあります。「現職の先生方の貴重な話を聞き、次回のSATにどのような姿勢で臨むべきか考える良い機会になった。また、仲間が不安に思っていることをみんなで共有した上で、先生のアドバイスを聞いたことが、私自身の不安を解消することにもつながった。教師の魅力や専門性を深く考えることもできた。まずはSAT活動を楽しみ、子どもたちと共に成長していけるよう努力を尽くそうと思った」とあるように、現職の先生方のアドバイスを伺ったり、仲間と情報を交流したりする中で、実践上の課題を解決していったことがわかります。

これは第4回の講座で、市内の小・中学校から15名の保護者に来ていただきました。この講座の感想ですが、「普段の授業などでは教師目線の話が中心で、保護者の考えや気持ちは想

像でしかなく、今回実際に会って思いを聞くことができずごくありがたく、またためになった。大切なのは、子どもの様子等を伝えていく、そしてコミュニケーションをとっていくこと、それと自分の思いを強く持って子どもに関わり熱意を見せていくことだと感じた。保護者が抱えている不安を少なくし、安心して子どもを学校へ送り出せるような雰囲気をつくってあげたらと思う」と語っています。

最後の講座、第10回教師力養成講座「不登校と教室での困難を抱える子の問題」は、当初予定した講座の内容を変更しまして、こちらにおられます山崎先生から講座で話していただいたのですが、その講座後の感想を紹介します。「SATでかなり困難なクラスに関わっている。以前学校別検討会で、児童に暴力を振われたり、どこから手をつければいいかわからなかったりの状況であると話をさせていただいたことがある。今日、1年の活動が終わって、来年からは他県で教員になるが、今ならもっと子どもたちの力になれると思い始めて、もう教員に自信がなくなるようなクラスだったのに、来年このクラスの担任になりたいなどと思った。すごく今日の先生の話も心に響いた。頑張る力を一杯もらった一日だった」ということで、最初の第一部でも話がありましたが、実際の現場に出て、どうしていいかわからず大変悩みながら、そしてその中で学校別検討会とか、こういう講座の中で現職の先生あるいは仲間と語り合う中で、手だてを得ていく。一歩ずつこう学生が前向きに取り組んでいるということで、私たちも一緒に問題を抱えながら、本当に、教師として力をつけているなど、また前向きに取り組んでいるなど強く思いました。

過日、本年10月に、中央教育審議会教員養成部会から、教職課程の学生に対する学校インターンシップの導入の提言がありました。これも教員としての資質を向上させるための施策として、本学で行っているSATの、現場体験活動をすることが高く評価されてこのような提言になったと思います。都留市では、先ほどもありましたように、積極的に取り組みを行ってきたということで、私自身もこれに関わりながら、大きな成果を得ているなど感じました。本日はここに都留市内の先生方に来ていただいています、今後も都留文科大学の学生がよりよく教師として育つように、また各小・中学校から協力を得て、この施策を進めさせていただければと思います。

私の発表はここで終わりますが、本日市内の校長先生、教頭先生、それから教務主任の先生、担当の先生方が来ていますので、少しここで現場での学生の様子、またこんなふうに大学のほうで進めてもらえれば、というような事を伺わせていただければと思います。では最初校長先生ということで、東桂小学校野木忠一校長先生、お願いします。

野木忠一（東桂小学校長）

皆さんこんにちは。ご指名頂きましたので、一言申し上げさせていただきます。私は教員として、教務主任、教頭、校長という立場でSATの事業に関わらせてもらいました。

担任としてSATに学生を迎え入れたことはありませんが、そんな中でですね、最初、教務主任時代にSATができたばかりのころの様子はですね、やはり現場の先生方の本音で言うと、打ち合わせをしなければならぬとか、また当時はまだですね、そんなにいろんな方が自分の授業を見てってという時代ではありませんでしたから、見られるということ考えたときにですね、出来たらうちのクラスはいらない、なんていう先生も、そういう先生もおられました。

それが、だんだん教頭、校長としてSATに関わる中で、意識の変化が生まれてきているのか

なと思うようになりました。今ですね、私の学校にもたくさんの学生が来てくれています、いないという先生は全然いないですね。来てくれると非常にありがたいという先生ばかりです。

また、学生の意識も変わりました。学生は本校で、最初1回目の説明会をするとすぐもうその瞬間から子どもたちに関わらなきゃいけないんですね。そういう厳しさがあるのですが、やはり先ほどの話にあったように、最初のころは戸惑う姿もたくさん見られたりして、結構アドバイスなんかもしたと思うのですが、今亀田先生が話をしてくれたような演習等を大学のほうでやって、SATへ来ていますので、説明を1回聞けば、ああこう関わればいいんだな、と理解してくれる学生さんがほとんどです。学校現場としても即戦力として頼りたい状況が生まれていますので、今後もこのSATが継続して行って、学校も学生も大学もお互いに教育ということ考えたときに、よい制度がますます続いていけばいいなということを考えています。

亀田

ありがとうございます。それでは、中学校のほうからということで、都留第二中学校の教頭先生がおられます、羽田静香先生お願いします。

羽田静香（都留第二中学校教頭）

こんにちは。都留二中の羽田と申します。よろしくお願ひいたします。

私自身は中学校の教員で、昨年度まで市内の都留一中、東桂中で勤務していて、この4月から都留二中に勤めています。どちらかというと、SATの先生方には現在の勤務校より前校の東桂中や都留一中でお世話になってきました。

SATについて、役に立つ役に立たないといった小学校と中学校の先生方へのアンケートを見たときに、中学校のほうが「大変役に立つ」が少なく、「役に立つ」というのが多いところで、自分もちょっと振り返ってみると、特にあの、放課後のタイプAに関しては、主体的にSATの先生たちにも関わっていただけているのですが、授業に入っただけタイプBのときには、中学校のほうでは教科担任が、学生との事前の打ち合わせがほとんどできなくて、来て、じゃお願いします、というようなことになってしまって、なんとなく充実感や達成感というような部分が作れていなくて、大変満足できたっていうところに繋がらなかったのかなあと、感じています。

私自身は国語の教員でしたので、じゃ先生すみません、今日この生徒とこの生徒がちょっと心配なのでついて、こういう時にこんな風に支援してください、とお願ひするのですが、まあちょっと時間がなくてところもありまして、なかなか事前の準備ができないまま授業に入るので、うまくいかないときもありました。中学校側も、そこを課題と捉えていますので、授業観察などを中心に、今後対応していきたいなと思っています。

あと、昨年度東桂中学ではタイプCのほうでも大変お世話になっています。特別支援という生徒たちは普段、どうしても限られた教員との時間が長くなりますが、SATの先生が来てくれる日にはとても嬉しそうで、すごくやる気を出して頑張る生徒の姿を見ました。今後とも、B・Cで本当にお世話になりたいなという、そんな気持ちです。以上です。ありがとうございます。

亀 田

ありがとうございます。今中学校のほうから現状も含めて話を伺っておりますが、都留第一中学校の教務主任の先生がおられますのでご発言頂きたいと思います。齋藤先生、よろしいですか。お願いいたします。

齋藤隆広（都留第一中学校教務主任）

こんにちは。都留第一中学校の齋藤と申します。よろしく申し上げます。

私も、都留一中とそれ以前の東桂中でもずっとSATにお世話になっていました。で、先ほどから話題になっている通り、SATの成果はあると思います。生徒は、小学校から年齢を重ねればますます学力差が広がっていて、個別指導が必要になります。そういった中で一クラス、例えば30人くらいのクラスが多いのですが、30人をひとりで見ると、当然ですが、たくさん目で見ただけのでは、やはりきめ細かな教育といえますか、指導の差がはっきりしてくると思います。

SATの学生さんに来ていただいて、たとえば1時間の授業をサポートしていただくとか、または放課後を見ていただくことはとても意義のある活動だと思います。現場でも、非常に助かると言っている先生もたくさんいます。こういったものを今後、さらに活用する方法も工夫しながらやっていかなければならないと思います。それから、生徒にとっても、我々教員と話すよりも、SATの学生さんに来ていただいて、しゃべりやすいお兄さんやお姉さんに、我々には言わないようなことも、どんどんしゃべってくれたりして、そういったことを共有できればよいと思います。例えば実習の活動の記録を見させていただいても、ああ、こんなことを、こんな生徒が言っていたんだな、というようなことを、記録に書いてもらっていることもあります。そういった情報を我々も活用して、よりよい指導を目指していきたいと思っています。

また、先ほどのお話にありましたように、SAT-Cの数は少ないですが、生徒は本当にSATの先生が来るのを楽しみに、普段クラスの中ではなかなか自分を表現できないような子も、SATさんの前でこう、本当に雄弁になって自分のことをしゃべっていると、そういう姿を見ると、すごく微笑ましくて、ああいいな、なんて感じたりしています。今後ともぜひよろしくお願いしたいと思います。

亀 田

ありがとうございます。続きまして、谷村第二小学校の古屋教頭先生にお願いしたいと思います。

古屋ひとみ（谷村第二小学校教頭）

こんにちは。谷村第二小学校の古屋といいます。よろしく申し上げます。

私は、都留市に勤務するのが今年度初めてです。それまでは、富士吉田市、それから富士河口湖町のほうで教師をしてきました。この都留文科大学の出身者なのですが、都留市に勤務するのは初めてなので、このSAT事業というものを聞きまして、驚きました。向こうにはそういった活動というのがないんですね。都留市のこのSAT事業の素晴らしさを、今年度この何か月かの間知って、本当に、こういったことが富士吉田市や富士河口湖町にもあったらまた違うなということを感じさせていただきました。その中で本校にはSAT-AとSAT-Bに入ってい

ただいております。

SAT-Aのほうは放課後の活動ということですが、今の本校が抱える最大の課題は、学力向上なんですね。それでももちろん授業改善とかいろいろなことを取り組むわけですが、その中で放課後をどのように充実させていくのか、ということを考えております。その中でSATさんの存在はすごく大きいものがあります。やはり放課後に残る子どもたちは、支援が必要な子どもたちです。その子どもたちに手厚く手を差し伸べたいと思っても、教師という仕事は忙しくて、十分に放課後に時間をとることができません。出張がやたら入ってきます。会議もたくさんあります。その中で、SATさんが時間よりも早く来てくれて、その時間の中でやるべきことやプリントの準備を手伝ってくださる。そして、その授業時間の中でも、子どもたちの気持ちをよく理解している。やっぱり支援を必要とする子っていうのは、なかなか授業に向かえないところがあるんですね。ですが、その子の気持ちをもち上げてくださりながら、本当によくやってくださっているなと思っています。

またSAT-Bのほうの授業時間に入っていたいただいている方々なのですが、昨年度までの方が悪かったとかそういうことではないんですよ。ただ課題として、なかなかこちらの意図することが伝わらない方もいた、なんてことも聞いていました。でも、今年度、私が見させていたいただいている限りにおいては、本当によくやっていたいただいております。どの方も真面目だなあという感じます。

先日、社会科見学がありまして、私もある学年について行きました。その時にもSATさんは、先頭に担任がいて私が後ろについたら、さっと自分で真ん中に入り込んで、もう着くまでの安全指導から始まって、着いてからも、話を聞くときにメモを取っていくんですが、うまく取れない子がたくさんいる。そのクラスには支援を要する子がたくさんいるのですが、その子どもたちに、さりげなく邪魔にならないように、さっさっさっさと入っているんですね。そして私が聞いかけると、それに対して的確に答えてくれる。そういう姿を見て、凄く成長されている、学生さんでもここまでできるんだ、ということを感じさせていただきました。

それから、6年生のほうにボランティアで入りたいと言って来ていただいている方がいるのですが、その方には本当に驚きました。修学旅行に出発するときに、朝の7時前だったのですが、子どもたちを見送りに来てくださったんですね。ここまで学生さんでもできるんだって、感動しました。

この事業は本当に素晴らしい。現場はものすごく厳しいです。現場に実際に入って、精神的に参ってしまってお休みをされたり、辞めてしまう先生方もいらっしゃいます。やっぱり現場の厳しさをこういう形で学生が知って現場に入ってくるということは、すごく大事なことだなと思っていますので、これからも素晴らしい活動を続けていただきたいと思います。長くなってすみませんでした。ありがとうございます。

亀 田

すみません。たくさんの方に来ていただきましたが、現場からということで、最後に谷村第一小学校の鈴木先生、お願いいたします。

鈴木 守 (谷村第一小学校教務主任)

こんにちは。谷村第一小学校の鈴木といいます。よろしく申し上げます。

いろいろお話を聞く中で思い出したのですが、私は、自分の子どもが東桂中学校へ通ってチューター制度をやっている、我が子からそんな話を聞いたなあというのを思い出します。

その頃私は禾生第一小学校に勤めていて、先ほどの野木校長先生と一緒にいたんですが、SATの学生さんが学級に入ることになりまして、Aのほうにつきましては、とても自主的で工夫があって、子どもたちが楽しみにしているなという感じだったんですが、私は6年生を担当してまして、Bの学生さんが入ってきたんですが、教育実習生を何度ももっていて慣れていたんですが、SAT-Bの学生さんはどう対応しようかって、話が進まないんです。できれば入ってこないほうがいいなというのが本音だったんですが、本当は。その後学生さんと学校の繋がりが深くなりまして、今谷村第一小学校に勤めていますが、先生方が必要としている学生さんがたくさんいます。

3年目になります、3年前の学生さん、たまたまだったと思うんですが、単位制になったばかりだと思うんですが、ちょっと学校のほうでも困るなあというような学生さんが多くて、カラーコンタクト、金髪、派手な服装、お化粧品、職員室でも話題になって、子どもたちも引いていたという形で、大学に2度3度お願いをしました。たまたまだったと思いますが。

昨年教職支援センターができて、そのおかげは非常に大きいと思うんですが、前年度の反省を伝える中で、今年の学生さんはとても素晴らしくて、そんなこと強制してなかったんですが、Aの学生さんはほぼ7割方、スーツで1年間通しました。やはり恰好から違っていたというのが昨年の様子でした。今年はさらにまた学生さんが素晴らしくて、前期にいくつか職員室のほうで話題になったことを、後期のガイダンスで話をしましたら、前期もよかったんですが、見違えるように変わりました。

特によかったのが、入ってくるときの挨拶ですね。普通の挨拶は前期でもできていたんですが、「SAT-Aでお世話になる〇〇です。今日は1日よろしくお願ひします」って入ってきて、終わった後は「〇〇先生の机にノートを置きに来ました。失礼します」って言って帰って、「来週もまた、よろしくお願ひします」で、3人入ってくると最初の人が出た後、あとは以下同文だったんですが、今回は一人ひとりが必ず、3人いても4人いても必ず自分の言葉で入ってきて自分の言葉で出ていくということで、職員室でも「先生変わったね、何が変わったの、どうして変わったの」なんて言われたんですけれども、別にただ前期に先生方からいただいたアンケートを読み上げただけです、何も強制してませんよ、なんて話をして。

本当に応用力があって、一番違うのは、今年の学生さん、AもBもリーダーですね。リーダーの学生さんがものすごいしっかりしているので、私の先手を打って「先生これはこういう風にしてもいいですよ」なんて言ってきて、とても気が付いてくれているので、ありがたいなと思っています。また休みについても、今日休みますとか何時いつ休みますという連絡を、今年は常に確実にしてくれますので、こちらとしても対応ができるってことで、困るってことがまずないです。

本校は、A・B・C合わせると30数名、来てくださっていますが、本当に先生方の希望が高いので、来年3年生も入って下さるということで、Bに関しては40名、本校で希望しています。学級2名ずつ配置して、先生方を応援してもらえるとありがたいなと思っています。本校は大変な子どもがいろいろいたり、大きな課題があったりして、学生さんには本当に苦勞を掛けて申し訳ないんですが、先生方が非常にありがたいと思っていますので、ぜひ来年も協力していただいて学校の活動が盛んになればいいなと思っています。今後ともよろしくお願ひいた

します。以上です。

亀 田

ありがとうございました。私も学校長をしていましたが、受け入れ側はいろいろな難しさとかあると思うんですが、SATで、放課後活動する時間帯を学校全体で設けて、先生方も一緒にという風に工夫して、本当に学校全体でSATを受け入れる体制を作っていただいています。それもやはりこれまでのSAT活動に関わった学生が、それだけの成果を残して、学校に対して子どもたちに対して、学習支援補助をしてきたということだと思うんですね。また来週にはSATのオリエンテーションが来年に向けてありますので、またそういう面で、学校側のそういう受け入れの気持ちを伝えながら、しっかり来年取り組んでいきたいと思います。

鳥 原

亀田先生、そしてご発言いただきました先生方、どうもありがとうございました。大変貴重なお話を伺えたと思います。ではここで、本学の教職支援センターの担当である宮下先生と山崎先生が来ておられますので、教職支援センターの関係者、教職支援センターの先生というお立場から、少し感想といいますか、お考えになったこと、お感じになったことを伺えればありがたいと思います。でははじめに宮下先生、よろしいでしょうか。

宮下 聡（教職支援センター特任教授）

本年度から教職支援センターで仕事をさせていただいております宮下と申します。

SATという言葉、さっき狙撃チームじゃないかという話もありましたが、私はこの大学に来てSATを知ったとき、素敵なシステムだなとは思ったものの、率直なところ仕組みが難しくよくわかりませんでした。で、1年経とうとしているところですが、まだ理解しきれていませんでした。しかし今日このフォーラムに参加して、あなるほど、こういう歴史があって、進んできたんだということが少しわかりました。内部にいる人間としてこんなことを言うのはおかしいとは思いますが、もっていねいに学んでいかなければいけないなと思ったところです。

私は長く中学の現場にいました。その体験をSATのことに結び付けて考えていたのですが、昔、現場にいたときにも、教職志望の卒業生が自分の空いた時間を使って、学校に来ていろいろな支援ボランティアをするという活動がありました。しかしそれは、事前にいつ来るということのを都合のつく範囲で登録して、来てみて気がついたところでお手伝いをしていくというレベルでした。ですから、教師のほうはその学生に何か指導をしなければいけないこともないし、それからその学生も特別に学校にこういう報告をしなければいけないという義務を負っているわけでもありませんでした。

そういう気楽なことだったので、それと比べても、この都留文科大学、あるいは都留市で日常行われているSATには、大変大きな意義があるなど、今日改めて感じました。一つ目は学生の実践的な学び、子ども、それから職員室、学校という現場に入って生の姿を見て、そし



てまた大学に戻って学びにつなげることができるということ、そして、二つ目としては、今度は学校側、小・中学校の立場からみれば、先生たちだけでは行き届かないような、細かいところのサポートができること、それから三つ目は、これまでのお話にもありましたが、都留に大学があるということの意味を、最大限に生かすシステムになっているなということ。都留以外のところで、こういうシステムなんていうのは私もあまり聞いたことがありません。本当にこの都留市の小・中学校が、この街に都留文科大学があるということによって得られるメリット、それはさまざまな可能性を持っていますので最大限に生かしていくべきではないかと、改めて思ったところです。

しかし一方、お話を伺いながら課題もあることを感じました。例えば、これが単位認定になるのであれば、学生の学びをきちんと評価しなければならないという、こういう責任が大学のほうにも出てきます。ではその学生をだれが指導し、だれが評価をするのかという、おそらくこういった課題もあるのではないかと私は思いました。先ほど、学生の書いたメモを見て、現場の先生が赤ペンを入れてくださっていること、こんなにありがたいことはないと思います。でも、ただでさえ多忙な学校現場の中で、どうやってこの時間を確保するのかという、こういうことを考えると、本当にこれは大きな課題だなと思います。

それから、学生の側からすれば、カリキュラムの過密さという問題があるんじゃないかなと。大学を離れていろいろな学校へ行こうとするときに、時間が重なってしまうという、そういう問題があります。大学での学びは理論にとどまらず、もっと幅広いものがあると思います。4年間で何を学ぶのか、ということと共に、SATとカリキュラムの問題、過密化の問題を考えていかなければいけないと感じています。

しかし、大きな意義のあることは確かなので、こういった問題は、解決されるべき課題として捉えていけば、大きな障壁にはならないだろうと私は考えています。いずれにしても、学生の学びと、そして現場の受け入れる側にとって、双方が助け合い、補い合って互いに利する形で進めていくべきと自覚しております。ぜひこれからもよろしく願いいたします。ありがとうございました。

鳥原

ありがとうございました。では続きまして、山崎先生よろしく願います。

山崎隆夫（教職支援センター特任教授）

皆さんこんにちは。都留文科大学の山崎と申します。

私はSAT-Cのほうのゼミを担当しています。今回はSAT全体に関わる内容でしたが、関わっている方が多く、凄い取り組みだなと思いました。

現代は、先ほど勝俣先生がおっしゃったように、学校だけで解決できないような、課題の大きい子どもたち、貧困とか虐待とか、僕も小学校の教師をやっていましたが、並大抵のことではないという状況がある中で、文部科学省がSSWを導入していこうとしているように、都留で行われていることは、子どもたちにとって、そして先生たちにとって、大学にと



ってどういう意味があるんだろうと考えると、とても深い意味があるような気がします。

家族が崩壊していたり、あるいは親戚がなかなか繋がらなかったり、困難の中にいるけれども、そこに若いお兄さんお姉さんが来るということの意味、おそらく都留の先生たちは、そういう意味を大切に受け止めてくださっていて、子どもと関わることを大事にしてくれている。

正直に言いますけれど、学生の中にも悩みや困難を抱えていたり、弱さを抱えている学生がいて、その学生たちも、子どもと付き合う中で、自分に自信を持ったり、新しい感性を獲得したり、子どもの姿を見つめることによって変わっていくという姿があるんです。課題はなかなか大変ですが、先生方のおかげで、学びの中にもたくさん評価できることがある、学生たちの感想アンケート、卒業論文とかそういうところにも生かされている。「生活指導論」とか「臨床教育学」とかの授業を担当していますが、そこにSATの子どもたちの話が登場してくるんです。こうした話は外には出しませんが、そこで学生たちは格闘して、悩み、問い、自分の人生とも向き合っています。そして、なんとかして先生たちとも話し合いたいと思うのですが、先生たちがとても忙しそうだとすることも聞いています。

先ほど宮下からも話がありましたが、現場の先生がよくぞ受け止めてくださっているなと思います。自分の教室に学生が入ってくるというのは、教室の子どもたちのことで精一杯なのに、学生の指導までしなければならないというのは、ある意味ではとても大変なことです。だけれども今の困難なこういう課題の中で、学生が入ることが子どもたちにも、先生ご自身にも何かの力になるだろうと思ってやってくださっていることを、とても嬉しく思っています。

そのためには文部科学省などでこういう取り組みをしているところ、都留の教育委員会などに支援があって、学生の面倒を見てくれる人がいて、しっかりとカンファレンスとか、子どもの問題を語り合える場を、あるいは担任の先生と、SAT-Cで困難な子どもと出会っているときに、その問題、そのA君Bちゃんの問題と語り合えるような場をつくりだし、時間を保障してあげたい。先生も大変だし、涙を流しながらやってくる学生もいるわけです。

あの子と出会うととても辛い、自分が蹴られたり悪態をつかれたりとか、そんなことは学校の先生だったらみんなそうです。わかっていると思いますが、そういう姿と出会いながら傷ついていくわけですね。それをカンファレンスのように、今赤ペンを入れたりしてくださるととても嬉しいのですが、語り合う場があったらもっといいなとも…。でも僕も、先生たちにはそんな時間はとてもないだろうということはよくわかります。

そうすると、何とかこの活動を豊かにする、制度的に保障するためには、そういう時間と豊かさを、どこかにつくって行って、たっぷりと話せる時間をつくり出してあげたいなと思っています。また、こうした取り組みの中で学びながら学生たちの子ども観が変わっていくことも皆さんに伝えておきたいと思います。最初は、自分が傷ついて、この子はどうなっているのだろうと思って、行くのが辛いと言う学生がたくさんいます。行くのが辛いだけでも、1月、2月、3月経つうちに学生の考えが変わってきます。あの子がちよっと笑ってくれたとか、逃げていったのを追いかけていったら、そうしたら全然違う姿を見せてくれた、こういうことに学生が励まされて、少しずつ少しずつ、現代の子どもたちと向き合うということはどういうことかということ、子ども観が深まっていくということを経験しているんですね。

だから、これ以上のことはなかなか言えないんですが、教育実習に行くと、他大学の人たちとか、同じグループの中に5、6人いた場合、その時に、都留から行った学生たちが言うんです。「どうしてああいう言葉を使うのかなあ」と。というのは、他大学の学生が悪いというわ

けではないのですけれど、「あいつをシメなくちゃだめだ」とか「あいつはどうなっているんだ」「学校からいないほうがいいんじゃないか」とか、そういうつぶやきをする教育実習生がいる中で、都留の学生たちがそういう見方はしない、子どもに対してね。子どもが傷つき、そういう風にして表現や表出をしているのかということ、姿を見ていて愛おしく思う。で、こういう学生が、本物の教師になる、育っていく、これをね、今都留の地域の人たちが支えてくださっている。そういうことを、面倒見てくださっているということに感謝したいと思っています。

鳥 原

先生ありがとうございました。多くの方々から、さまざまな視点でご発言いただきました。これは今後、とても貴重な記録となり、本学にとって大きな意味を持つと思います。では最後に、佐藤先生からこのフォーラムを振り返ると言いますか、イメージを共有するために、ご発言をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

佐 藤

まとめの発言を、とのことでしたが、そんなことは特になくてですね、皆さんがそれぞれ発言されて、いろいろな意味でこのSAT活動について、捉え直していただけたと思います。それはそれぞれのお立場で引き取っていただければいいかなと思いますが、この活動を始めるにあたって、いろいろな制約があったわけですが、一番大事にしたことは何かということ、一つはどうか、今は一つしか言いませんが現場での体験、学校での体験と、それから理論といますか、教育研究という、この二つを行き来する、まあ往還と言ったり往復と言ったりしますが、現場体験だけをそのままやっているのではなくて、あるいは理論だけを積むのではなくて、現場と理論、自分の子ども体験、学校体験というものと、教科研究、教育理論というものを、どうやって結びつけるかということ、この活動の重要性というものを、少なくとも私は感じてきました。そして、それが今、さまざまな方々の力によって、少しずつではありますが、つくられてきていると感じています。

面白いことに、こういった発想というものが世界的な流れになってきている。この活動を行いながら、私たちはカナダのサイモン・フレーザー大学との繋がりをつくることができましたし、それからフィンランドのオウル大学とも繋がりをつくることができました。そこで重視されていたのは、やはり理論と実践の往還であると共に、反省的実践家としての教師、つまりやりっぱなしではなく、自分の行った今日の行為が、子どもにとってどのような意味を持っていたのかということについて、振り返ることができる。そういった教師像というものが、世界中で追求されている。それと同時に大事なことは、子どもに対して敬意を払うということでした。子どもを「操作」の対象とするのではなく、子どもから学ぶ。教師が学習者になるということ、そういう理念が多くの国々で共有され始めてきているということが確かめられたこともありました。いずれにしても、そういう世界の流れと共に都留のSAT活動はある、つくられてきた、そしてこれからもつくられていくということに希望を持ちたいと思っています。今日はどうもありがとうございました。

鳥 原

佐藤先生ありがとうございました。これで第二部を終了いたします。従いまして、これで本日予定したスケジュールを終了します。年末の大変貴重なお時間を割いていただきまして、多くの方にご参加いただきました。改めて御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

それでは、これもちまして、地域交流研究フォーラム「地域交流研究活動～SAT活動をふり返って～」を終了します。どうもありがとうございました。

活 動 報 告

2015年度

活 動 報 告

2015 (H27年度)

1. 2015年度の活動について〔概況〕

1. はじめに

本年度4月に、鳥原正敏（初等教育学科教授）が新センターに任命された。また、副センター長には、杉本光司氏（情報センター教授）が就任した。

本年度の最も大きなトピックとして、地域交流研究センター移転の計画が実行されたことを挙げたい。本センターは、これまでの活動の拠点であったコミュニケーションホール地下1階から、4号館1階に移転することが正式に決まった。また、そのための準備として学内の調整を行うとともに、書庫として作られた4号館1階を作業ができる空間にするための大規模な改修工事を行ったあと、年度をまたいだ引っ越しの作業を行った。

更に、福島万紀氏が社会学科専任講師として、内山美恵子氏がCOC推進機構特任教授として着任、同時に本センター委員に就任した。またこの両氏が中心となって、近年休止していた「暮らしと仕事部門」が再開された。

2. 地域交流研究センターフォーラム開催について

12月12日（土）に第11回地域交流研究フォーラム「地域交流研究活動 — SAT活動をふり返って —」を開催した。これは、平成28年度よりSAT活動が地域交流研究センターから、教職支援センターに移管されることを踏まえ、これまでの活動を振り返りつつ、改めてその意義について確認するとともに、地域交流研究センターと教職支援センター関係者が、共にこれまでの成果と今後の可能性について理解し共有することを期待するものであった。

当日は佐藤隆先生（初等教育学科教授）や勝俣武男先生（元キャリアサポートセンターSAT担当）などの本学関係者、活動の現場である小・中学校の先生方が集まり、大変意義深いフォーラムとなった。

3. 各部門の活動

本年度、「暮らしと仕事部門」が再開されたことにより三部門が揃った活動となった。大まかな様子は以下のとおりである。詳細は本年報の関係のページをご参照頂きたい。

3-1 フィールド・ミュージアム部門

フィールド・ミュージアム部門では、地域の自然や文化を観察し、記録し、学び合う場を創ることで自然との関わりのあり方や文化のありようを探究しようとしてきた。平成27年度は、これまで取り組んできたさまざまな諸実践を部門の体制に見合うよう整理をし、①生きものに親しむキャンパスづくり、②研究・教育活動、③展示活動、④地域の自然や生活の記憶を収集

し、保存し、活用する事業、⑤地域を調べ、記録し、学び合う事業を行なった。（詳細は本誌35ページ参照）

3-2 発達援助部門

・地域教育相談室

地域教育相談室の活動は本年度で13年目を迎えた。昨年度同様に主に以下の活動を行った。

- ① 来室、訪問、電話・ファックス・電子メール等による相談活動
- ② 教育委員会等が主催する教職員研修への講師派遣やサポート
- ③ 校内研究等への講師派遣及びサポート
- ④ 公開教育講座等の研修会の実施
- ⑤ 都留市教育研修センターと連携した現職教員学級経営サポート
- ⑥ 山梨教育カウンセリング研究会との共催による活動
- ⑦ その他（地域の教育関連団体からの依頼への対応）

（詳細は本年報40ページ参照）

・地域特別支援教育

地域特別支援教育は、特別なニーズのある子どもたちの教育・福祉的支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを目的として、平成27年4月に発足した新分野である。本年度に行った主な活動は以下である。

- ① 知的障害・発達障害の子どもたちを対象にした週末の居場所づくりの活動
- ② 思春期・青年期の発達障害の子どもたちを対象にしたキャリア学習活動
- ③ 一般市民や現職教員向けの障害理解研修
- ④ インクルーシブな地域づくりの啓発イベント

本年度は初年度ではあったが、①～④についてまんべんなく活動を展開できた。

（詳細は本年報48ページ参照）

3-3 暮らしと仕事部門

暮らしと仕事部門は、担当者不在のため平成25・26年度の活動を休止していたが、平成27年4月より社会学科の福島万紀氏とCOC推進機構の内山美恵子氏が新たに担当者として任命されて活動を再開した。「都留市を流れる水と暮らしと農のかかわりを探るプロジェクト」を設定し計画を立案、本年度はその初年ということで、対象地域に関する予備調査と研修会を実施した。（詳細は本年報51ページ参照）

4. おわりに

本年度最大の活動は、本センターの移転であろう。これは、本センター発足以来の大事業であったため、準備や作業には関係の先生方や事務局、学生諸君に大きな負担を強いることとなった。また移転には膨大な作業があり、慌ただしく多忙な一年であった。幸い多くの方々のご尽力により、作業は予定通り進み、来年度初頭のオープンを目指している。

新センターを通して、本学の教員と学生が地域に関わりながら主体的かつ協働的に活動する

姿を発信すること、本センターがCOC推進機構とより密接に連携すること、地域の方々が気軽に訪れられるようにすることを期待している。

また、センターブログの開設も特筆したい。本年度より「地域交流研究センターブログ」が開設された。これにより、本センターの活動を時系列で記録しながらタイムリーに発信することができるようになった。

更に、地域特別支援教育による「クロボ」の活動にも注目してほしい。これは「インクルーシブ」という新しい概念による活動で、今後、センターの大きな柱となり得る活動であり、学内や地域から注目が集まっている。

本年度の活動を、センター会議とセンター運営会議の様子をもとに振り返ってみると、節目の年に際し、センターのあり方をどのように求めて行くべきか、といった議論が交わされてきた。また、フィールドノートの合本についても検討が重ねられている。これを目指して、1月8日(金)に大田堯先生のご自宅を、北垣憲仁氏と杉本光司副センター長が訪問、お話を伺った。ここではフィールド・ミュージアム構想の原点について確認するとともに励ましのお言葉をいただいた。これは、本センターの活動が長い年月をかけて築き上げられてきたこと、諸先輩方や多くの卒業生に見守られていることを象徴する出来事であった。

文末ながら、長い間、本センターの活動を見守り続けてくださった名誉教授の畑潤先生が非常勤講師としての定年を迎えられた。これまでのご貢献、ご尽力に感謝と敬意を表したい。

(文責：地域交流研究センター長・鳥原正敏)

II. 各部門の活動

II-1. フィールド・ミュージアム部門

担当教員：別宮有紀子・北垣憲仁・鳥原正敏

【27年度の活動概要】

フィールド・ミュージアム部門では、地域の自然や文化を観察し、記録し、学び合う場を創ることで自然との関わりのある方や文化のありようを探究しようとしてきた。2015年度は、これまで取り組んできたさまざまな諸実践を部門の体制に見合うよう整理をし、①生きものに親しむキャンパスづくり、②研究・教育活動、③展示活動、④地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する事業、⑤地域を調べ、記録し、学び合う事業を行なった。計画した事業は予定通り終えることができた。

【活動の状況】

1. 生きものに親しむキャンパスづくり事業（大学のキャンパスを自然に親しむ入り口と位置づけ、教育活動や市民との交流の場としても活用していこうとする取り組み）
 - ① 附属図書館ビオトープの手入れ【学生4名とともに週1回のペースで草刈り・剪定などの作業を行なった】
 - ② 「つるりん」の事業【1号館に隣接したビオトープで、約40年前に本学の教員と職員により作られた、都留周辺の山地植生を模したビオトープである。2015年度は初等教育学科の専門科目「生物学実験」「専門演習Ⅰ」において、生物相の調査や、展示の作成、草刈りを行なった】
 - ③ 「ムササビライブカメラ」【「フィールド・ミュージアム部門」のHPで映像およびブログによる情報発信を行なった】
 - ④ 「キャンパスにリスを呼ぶ会」【リスに関連したメールニュースを発信した】
2. 教育活動（地域の小学校と連携し、身近な自然に親しむというフィールド・ミュージアム部門の理念に沿ったプログラムで授業を行なった）
 - ① 文大附属小学校における連続授業【5月11日、5月28日、6月23日、7月10日、9月25日、10月22日、11月27日】
 - ② 上野原市立島田小学校自然観察授業【10月19日、11月6日】
3. 展示活動（市内のミュージアム都留や市立図書館と連携した展示活動。また富士急行と連携して都留文科大学前駅の駅舎を分館として展示活動を継続している）
 - ① 市立図書館との連携事業【2015年10月27日～11月8日、資料紹介展示『昭和史かるた』】
 - ② ミュージアム都留との連携事業【2014年3月20日～2015年5月6日、企画展『写真でたどる都留の時代 — 未来へつなぐ地域の記憶 — 』開催】

4. 地域の自然や生活の記憶を収集し、保存し、活用する事業（「地域の資料や記憶の保管庫」として、地域の生活の記憶や過去に撮影された写真資料などを収集し保存する活動を行なった。この取り組みは、ミュージアム都留と連携した事業でその成果を企画展として公開している）

① オープン・アーカイブ事業【ミュージアム都留と連携して地域で撮影された写真を収集、2016年1月現在で8000枚をデータベース化した】

5. 地域を調べ、記録し、学び合う事業（学生が主体となり地域の自然や文化を記録し発信する『フィールド・ノート』を編集・発行している。本年度も4号を予定通り発行した。合本に向けた準備として『フィールド・ノート』を高く評価されている大田堯元学長に2016年1月8日にインタビューを行なった）

① 『フィールド・ノート』の発行

85号：2015年6月28日発行、500部

86号：2015年9月28日発行、500部

87号：2015年12月24日発行、500部

88号：2016年3月24日発行、500部

【28年度に向けて】

これまででも多くの実践を整理しながら体制に見合った効果的な活動になるよう努めてきた。しかし現在の部門の体制では現状を維持するのは難しい。さらに事業を整理し集約することを心がけたい。フィールド・ミュージアム部門の活動に参加する学生や市民とともに①『フィールド・ノート』の編集・発行、②キャンパスやその周辺の整備およびフィールドとした自然観察会など身近な自然に親しむ事業、③市民との交流会に特に力を入れていきたいと考えている。

（文責：北垣憲仁）

Ⅱ－２．発達援助部門

Ⅱ－２－１．SAT事業

Ⅰ SATの目的及び活動内容

① 目的

教員志望学生が、SAT（学生アシスタント・ティーチャー）として都留市内小中学校で児童生徒の学習支援に携わることで、子ども中心のきめ細かな指導を一層充実させるとともに、大学における教師教育の深化・発展を図るものである。活動形態は、①放課後における小グループでの学習支援を通して、学習指導・生徒指導・教師の在り方等について経験的に深めるSAT-A、②授業中の学習支援を中心として教員の補助的な活動を通して、学習指導・生徒指導・教師の在り方等について経験的に深めるSAT-B、③学力不振・不登校傾向・障がい等による困難を持つ子どもを対象にした個別的な支援や当該児童のいる学級での補助的な活動を行うSAT-Cの3つのタイプがある。

運営に当たっては、学生アシスタント・ティーチャー（SAT）運営委員会を設けて、都留市教育委員会・都留文科大学・市内の小中学校の三者が協力して行っており、このような学校間連携・ネットワークの構築も地域を基盤とする教師養成教育の実践活動である。

② 活動内容

2015年度は、次の表のような参加状況のもと、SAT活動を行った。なお、Cタイプについては、一定の専門的知見が必要なこともあり、臨床教育学専攻の学生のみの活動となっている。子どもの状態に合わせた適切な支援が必要なこともあって、年度当初に各学校から出される要請を勘案しながら学生を配置している。

学 校 名	SAT-A	SAT-B	SAT-C	合計(学校ごと)
谷村第一小学校	24	36	7	67
谷村第二小学校	4	19	0	23
都留文科大学附属小学校	19	6	2	27
東桂小学校	26	27	11	64
宝小学校	0	18	1	19
禾生第一小学校	16	22	4	42
禾生第二小学校	2	26	4	32
旭小学校	10	4	0	14
都留第一中学校	26	54	3	83
都留第二中学校	6	13	0	19
東桂中学校	23	14	1	38
合計(SAT種別ごと)	156	239	33	428(243)

各タイプの学生数は、前期・後期の延べ人数。()内は実人数

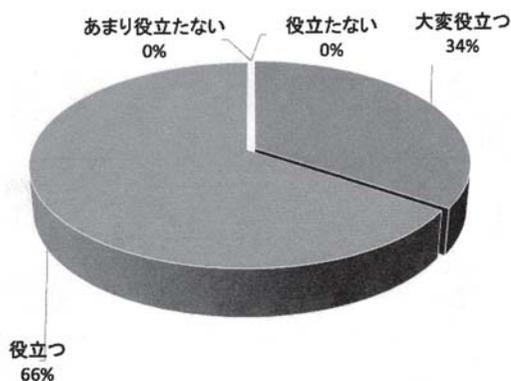
2 2015年度の活動の総括

次のグラフは、SAT-AとSAT-Bに参加した4年生を対象に、活動が終わる2015年12月8日に、「SAT活動は学校で仕事をする上で役立つと思うか」について、聞いた調査結果である。

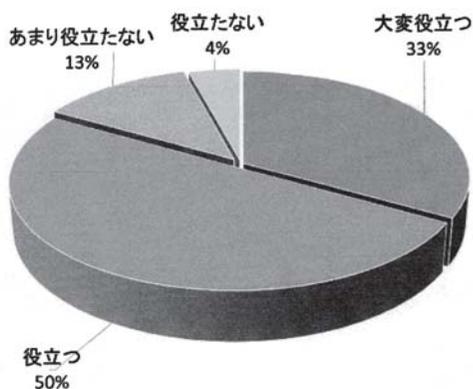
SAT-Aについては、小学校でSAT活動を行った学生32名の34%が「大変役立つ」、66%が「役立つ」と回答している。中学校でSAT活動を行った学生24名の33%が「大変役立つ」、50%が「役立つ」と回答している。また、「あまり役立たない・役立たない」が17%ある。SAT-Bについては、小学校SAT活動を行った学生53名の66%が「大変役立つ」、30%が「役立つ」と回答している。中学校でSAT活動を行った学生40名の33%が「大変役立つ」、62%が「役立つ」と回答している。

この調査結果から、SAT-A、SAT-Bの活動を行った学生のほとんどが「SATは、学校で仕事をする上で役立つ」と思っていることが分かる。今回は、SAT-Cに参加した学生に対してはアンケートを実施しなかったが、授業において同様の声が聞かれた。

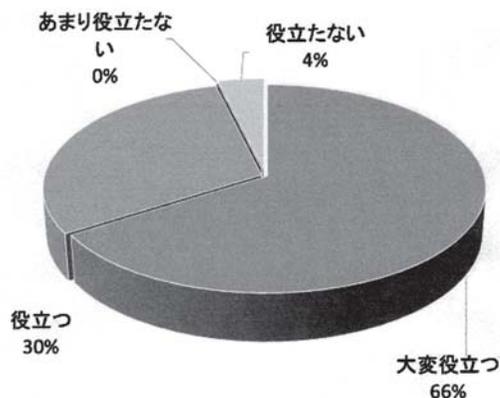
SATは、学校で仕事をする上で役立つか
小学校 SAT-A 32名



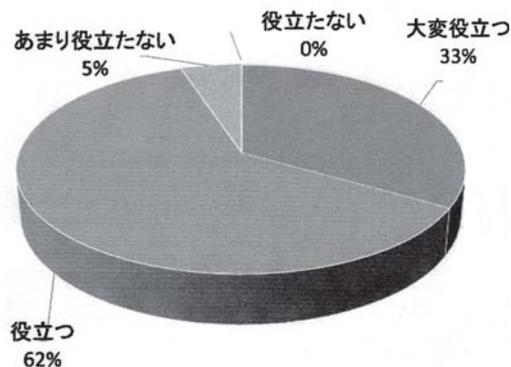
SATは、学校で仕事をする上で役立つか
中学校 SAT-A 24名



SATは、仕事をする上で役立つか
小学校 SAT-B 53名



SATは、仕事をする上で役立つか
中学校 SAT-B 40名



学生は、「大変役立つ」の主な理由として、「問題行動をとる子や、学習のつまずき、悩みを抱える子への対処方法を、自分ならどうするだろうと考え、時に実践できた。」、「生徒との関わり方や、教師にどのような力が必要なのかについて学ぶことができた。」、「生徒とどのように接すれば良いのか、自分自身に何が足りないのかについて学ぶことができた。」、「放課後学習支援・授業支援と異なる教育環境の中での工夫や問題点などを学校別検討会で意見交換することができ、とても有意義であった。」等を挙げている。学生は、自分の実践を見つめ直し、現場の教師の指導方法を参考に、仲間と討論し、自分なりに学習指導・生徒指導を考え工夫し、成果を挙げている。また、厳しい学校状況で悩み努力した学生ほど、学びは大きいものがある。

SATを受け入れる学校のSAT担当者は、学生のSAT活動をどのように評価しているかを見定めるため、2015年12月24日に、「学生のSAT活動に取り組む様子はどうであったか」、「学生は、SAT活動で、貴校の教育にどのような面で貢献できたか」について調査した。SAT担当者からは、「SAT学生は意欲的に活動に取り組み、主体的に児童生徒と関わり、どのように指導すべきか考え、継続的な指導法や支援の改善に努めていた。」、「新しいアイデアを提示した

り、自分のスケジュールを活動に合わせて変更して1回でも多く参加しようとしたりする学生が多数あった。」、「個別指導を主にして頂き、理解が困難な子が学習意欲を持つことができました。」、「周りの状況を見ながら、担任と連携を取り、同じ歩調で指導していた。」等の高い評価を頂き、学生がSAT活動を行うことで、きめ細かな指導が充実し、児童生徒が学習意欲を高め、基礎基本の定着及び学力の向上につながったと述べて頂いている。一方、「やや消極的な面が見られる。」、「最初、子どもとの距離感に迷っているように感じた。」、「児童と人間関係をうまく築けない学生がいた。」等の学生が改善すべき回答も寄せられている。子どもとの距離感を縮め、人間関係をどのように築いていくかは、学生が学校現場に自分を置いて初めて体感できることである。多くの学生は、子どもとの関係を築くために、積極的に話しかけたり、休み時間や放課後一緒に遊んだりすることで、子どもとの距離を縮め次第に人間関係を築いている。また、音楽会や運動会に参加したり、修学旅行の見送りのため早朝学校に駆けつけたりしている。このような学生の熱意溢れる行動が、児童生徒の心を揺り動かし、子どもや教員との信頼関係を築いていくのだと考える。

学生のSATに対する要望の中に、活動上の悩みや課題等を担当教師と相談する時間が欲しいとの意見が多く見られる。また、多くの学生が、保護者との関係をどう築くか、不安を抱いている。しかし、学校現場では、休み時間・放課後も、生徒指導・打合せ・会議等があり、学生と話し合う時間が取れないのが実情である。そこで、教師力養成講座へ、現場の教職員や保護者を講師として招請し、現場の先生方や保護者と語り合う時間を設定した。講座には、市内各小中学校より、校長・教頭を含む教職員22名、保護者15名に参加して頂いた。講座に参加した学生は、「現職の先生から教師の魅力を聞くことで、教師への熱意が高まるとともに、現職の先生の大きさを感じた。」、「仲間が不安に思っていることを共有した上で、先生のアドバイスを聞いたことが、私自身の不安を解消することに繋がった。」、「実際に保護者の話を聞いて、少し苦手意識のあった保護者への対応の不安が減った。」、「上手く指導できたり話ができたりするだけが保護者から評価されるのではないということが分かり、新米教師でも熱意と誠意を持って対応していきたいと思うことができた。保護者にも児童生徒にも、私の思いをしっかりと伝えたとともに、成長し合えるよう努力していきたい。」等と述べている。このように、学生は、現場の教職員からSAT活動への指導助言を頂いたり、保護者から若い先生方への励ましを頂いたりすることで、子どもに寄り添い、子どもや保護者から信頼され熱意溢れる教師として育っている。

2016年度は、SATの対象が4年次生から3年次生へ移行する予定である。3年次生と4年次生が同時に、都留市内小中学校でSATに携わる。そのため、市内小中学校に、来年度は3年次生と4年次生のSATを受け入れて頂くなど、大変なご苦勞を頂くことになる。幸い、市内小中学校には、SATの対象学生の移行をご理解頂き、受け入れの協力体制を築いて頂いた。これは、これまでのSAT学生の都留市小中学校教育への貢献を高く評価して頂いているからと考える。今後も、SATの目的である「児童生徒の学習支援に携わることで、子ども中心のきめ細かな指導を一層充実させるとともに、大学における教師教育の深化・発展を図る」ことで、本学学生がより良い教師として成長していくよう指導していきたい。

(文責：亀田孝夫)

Ⅱ－２－２．地域教育相談室

(1) はじめに

地域教育相談室の活動は本年度で13年目である。昨年度同様に主に以下の活動を行った。概要については(2)(3)(4)(5)に、まとめについては(6)に記述した。

- ① 来室、訪問、電話・ファックス・電子メール等による相談活動
- ② 教育委員会等が主催する教職員研修への講師派遣やサポート
- ③ 校内研究等への講師派遣及びサポート
- ④ 公開教育講座等の研修会の実施
- ⑤ 都留市教育研修センターと連携した現職教員学級経営サポート
- ⑥ 山梨教育カウンセリング研究会との共催による活動
- ⑦ その他（地域の教育関連団体からの依頼への対応）

(2) 相談、研修依頼件数と種別

平成27年度に、地域教育相談室で受けた相談、講師依頼の概要については以下の通りである。①の「その他の事務的対応」とは、講師派遣や研修会のサポート活動に必要な事務的な対応である。メールによる対応が増加し電話・FAXによる対応が大幅に減った。この数には含まれていない担当者の携帯電話での対応は依然として増加している。②には研修会の内容や進め方についてのアドバイスと事務処理を分けてカウントすることが難しいため、その両方をあわせて集計しているが、現場の状況を説明し、研修内容のコンサルテーションを求める傾向は増えている。相談室の現状から70件が妥当と考えている④の訪問による活動は90件ほどに減少したが、北麓・東部地域が増加した。①～④の相談件数をさらに集計した総数を⑤にまとめた。

① 電話&FAXによる相談活動の概要（担当者が携帯電話で行った対応は除く）

相談内容	地域別対応件数			合計
	北麓・東部	県内	県外	
児童生徒の問題行動についての対応	0	0	0	0
校内研究・調査・研究の進め方や内容についてのコンサルテーション	1	1	14	16
その他の事務的対応	26	4	35	65
合計	27	5	49	81

② メールによる相談活動及び事務処理の概要（応答を1回とカウント）

相談内容	地域別対応件数			合計
	北麓・東部	県内	県外	
研修会の進め方・事務処理	79	28	363	470
学級・学年経営、メンタルヘルスなど	1	1	9	11
合計	80	29	372	481

③ 来室による相談活動の概要

相談内容	地域別対応件数			合計
	北麓・東部	県内	県外	
研修会及び会議の進め方など	1	0	0	1
学級・学年経営、メンタルヘルスなど	0	0	0	0
その他	4	4	0	8
合計	5	4	0	9

④ 訪問による相談活動

相談内容	地域別対応件数			合計
	北麓・東部	県内	県外	
Q-Uによる学級集団の理解と対応のポイント	2	0	5	7
Q-Uの結果に基づく学級コンサルテーション	10	3	24	37
学級集団育成の具体的な方法についての理論と体験	0	0	20	20
その他	10	3	12	25
合計	22	6	61	89

⑤ 形態別による相談活動の概要

形態	地域別対応件数			合計
	北麓・東部	県内	県外	
電話 & FAX	27	5	49	81
メール	80	29	372	481
来室	5	4	0	9
訪問	23	6	61	90
合計	135	44	482	661

(3) 教育関連講座・研修会の実施

地域教育相談室主催の公開講座を例年通り2回実施した。

1) 第1回公開講座

日時：2015年5月29日(金) 18:30～20:15

内容：「教育に活かすアドラー心理学」

講師：会沢信彦氏(文教大学教育学部教授・臨床心理士)

場所：都留文科大学2号館 2101教室

参加者：158名(教育関係・一般87名、学生71名)

概要：これについては2015年7月8日発行の学報128号の講演会だよりにて報告済みである。また、参加者の代表の感想については地域交流センター通信27号に掲載。その様子は6月23日付の山梨日日新聞にも取り上げられた。

2) 第2回公開講座

日 時：2016年2月6日(土) 13:00～16:30

内 容：「構成的グループエンカウンター～ふれあい・自他理解・人間関係形成～」

講 師：品田笑子(本学COC推進機構特任教授)

 箭本佳己(本学保健センターカウンセラー)

場 所：都留文科大学1号館 1215教室

参加者：22名(教育関係・一般10名、学生12名)

概 要：前半は構成的グループエンカウンターについての講義、後半はエクササイズの体験学習を中心に行われた。概要については地域交流センター通信27号を参照。また、当日の様子については地域交流センターブログのアーカイブ(2016年2月)を参照。

(4) 山梨県内の教育委員会及びその他の教育関係団体との連携

1) 都留市教育研修センターと連携した現職教員の学級経営サポート

今年度も「現職教員学級経営サポート」用に年10回20枠を設定し、5月26日(火)の都留市新転入・新採用教員の研修会で学級経営についての講演と相談室の利用の仕方についての説明を行った。この枠の利用は、今年度も1つの学校を2回訪問し、述べ11学級のコンサルテーションを実施したにとどまったが、日程を変更してこの枠で都留市教育協議会幼児教育・保育問題部会で「ソーシャルスキル教育」をテーマに研修会を実施した。昨年度から始めた市担教員サポートでは授業参観を4回(4名)、授業を含めた児童生徒への対応に関するアドバイスを5名に行った。昨年度の時期的にもっと早めに実施できれば良かったという反省を受け、今年度は3学期ではなく2学期に行った。困り感は昨年度の3学期の方が明確だったが、実践に活かすという点では2学期実施が望ましいと思っている。次年度もこの取組を継続するとともに、新しい地元のニーズを掘り起こし新しい展開を考えていきたい。

2) 南都留教育相談ネットワーク会議

地域の教育、福祉関係の担当者が年3回集まり、連携を目標に情報交換をしたり、活動を紹介し合ったりしている。今年度からは会のニーズを考慮し初等教育学科専任講師の堤英俊先生にも助言者として参加していただいた。また、今年度は3年に1回となった提案の年に当たり、教育相談室のかかわったケースの中から、個別指導と一斉指導を統合した学級経営の効果について紹介した。

3) 富士吉田市教育委員会

今年度も引き続き「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業」の運営協議会の代表として協力し、年2回の会議では座長を務めた。また、富士吉田市教育研修所の依頼を受け、Q-Uの基礎講座、自分の学級のデータを持ち寄っての事例分析会(2回)、実践発表会の講評を担当した。

4) 山梨教育カウンセリング研究会

今年度は担当者のスケジュールの関係で一堂に会しての研修会は実施できず、会のメンバー個人との学級経営サポートの交流のみとなった。メンバーの異動等の関係で今後の会の継続は困難と思われる。

5) 甲州市教育委員会

甲州市立塩山南小学校で「Q-U結果を活用した授業づくり」と「Q-U結果から見る学校の実態分析と今後の取組の方向性」について講演した。

(5) まとめ

まず、地元への地域貢献についてである。北麓・東部地域の依頼が増え、地域とのつながりがさらに広がったことは成果である。一方で、都留市教育研修センターとの連携による現職教員サポート活動は相談室がボランティアで対応している事業であるが、市担教員のサポートの他には1校の依頼しかなかった。もっと地域貢献ができるように、援助の内容や展開の仕方について引き続き検討していきたいと考えている。

次に公開講座についてである。第1回の公開講座は参加人数だけでなく、アンケートから多くの方が内容に満足していることが伺え、テーマと講師が地域のニーズにマッチした企画だったと考えている。2回目の公開講座は、ほぼ毎年同時期に構成的グループエンカウンターをテーマとして実施している。今年度の参加人数は多くなかったが、参加した学生のアンケートを読むと充実した体験をしたと思われる。第1回公開講座は地域のニーズに合った企画を、第2回公開講座は次年度の集団育成の前倒し研修を目的としたこの時期の定番の講座にしていきたいと考えている。今年度も講座開催にあたり事務局スタッフの広報活動や準備に大変助けられた。この場を借りて感謝したい。

最後にサポートの内容についてである。サポート体制という受け皿は必要であるが、サポートの必要がなくなることが本来は理想である。これまでの実践をもとに、学校現場が自律的に学級・学校経営や児童生徒の発達支援をするための方法やシステムについての知見の提供を模索していきたい。

〈H28年度の活動計画〉

1. 研修会の企画・運営

- ・公開講座を年2回程度実施

2. 山梨県内の学校教育サポート

- ・富士吉田市教育委員会、山梨県教育研究所、甲州市教育委員会との連携
- ・その他、各校内研修会への講師派遣

3. 地域の活動への協力

- ・南都留教育相談ネットワーク会議への参加
- ・都留市教育研修センターとの連携による教師サポート

- ・「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業」への協力

4. 相談活動

- ・教師の学級経営のコンサルテーション及びアドバイス
- ・教師・教育関係者個人の臨床的問題への対応

5. その他

- ・那須塩原市教育委員会との連携
- ・郡山市教育委員会との連携（被災地支援を含む）

（文責：品田笑子）

Ⅱ－２－３．地域情報教育

1. 活動指針

2007年度（平成19年度）から地域交流研究センターにおける活動の柱の一つである「発達援助部門」の中の分野の一つとして「地域情報教育」が取り込まれました。

「地域情報教育」における活動の指針として、当初提示されたものからは、周りの環境の変化とともに修正をしつつ、現在は、次の（１）・（２）を掲げている。特に2011年度からは、初等教育学科図工・美術教室の鳥原先生が中心となって活動している、地域への美術教育支援プログラムの中で、都留市内では旭小学校をフィールドとした、図工・美術と情報の連携した新しい図工・美術教育システム作りプロジェクト（たからばこ作戦）を活動の一つとして加えたことによって、より注目度の高い活動をしている。

（１）小中学校への情報教育全般に関する支援

- ・都留市情報教育研究委員会（教育委員会、全小中学校情報教育担当者）への協力
- ・ICTを利用した学校業務に関する研修会の開催
- ・小中学校情報教育への支援
- ・大学と小中学校間での遠隔授業の実施

（２）図工・美術と情報の連携した教育システム作りプロジェクト（たからばこ作戦）

- ・旭小学校、子どもアトリエ（兵庫県西宮市）を協力校・組織とする。
- ・保護者への説明、作品の撮影及び利用に関する許諾を得る
- ・交流支援

これらの活動の中において、昨年度には旭小学校の3階に無線LANの設置工事を行ったものの、これを活用できるパソコンやタブレット等の機器が小学校において準備できず、また、平成28年度に計画されていた、教育委員会による旭小学校へのタブレット配置計画についても、予算査定段階において取りやめとなってしまった。しかし、当初導入が予定されていたタブレットについては、事前に小学校における活用に対しての研究の必要性もあり中止決定以

前に2台を購入し準備していたため、このタブレット機器についても小学校での活用法について検討を行っていくこととなった。

2. 平成27年度の活動

☆平成27年5月22(金)～23日(土) (杉本、鳥原、布山、大輪) 西宮市 ギャラリー小さな芽
『さつき展2015』に参加、作品の撮影、著作権の許諾について、今後の活動計画に対する打ち合わせ。

☆平成27年6月3日(水) 16:30～17:30 (杉本、鳥原、布山) 旭小学校
たからばこ作戦についての今後の活動計画について、校長先生、国利先生に対して説明、著作権許諾について承諾を得る。

☆平成27年7月24日(月) 13:00～ (杉本、鳥原、布山、大輪) 東京都台東区上野
「たからばこ」システムにおける、データベースの今後のシステム変更や活用について(株)CMSコミュニケーションズの担当者との打ち合わせ。

☆平成27年8月20日(木)～22日(土) (杉本、鳥原、布山、大輪) 富山大学
『2015 PC Conference』における論文採択と発表
主催：CIECコンピュータ利用教育学会
「ICTを活用した図画工作の新たな活動について」－「たからばこ作戦」の実践を通して－と題し「小学校教育分科会」において研究発表

☆平成27年8月27(金) (杉本、鳥原、布山、大輪) 兵庫県西宮市「子どもアトリエ」
今年度開催する予定のフォーラムについての確認、データ登録、データベースシステムの改善について、上田由紀子さんと打ち合わせ。

☆平成27年10月23日(金) 13:00～ (杉本、鳥原、布山、大輪) 東京都台東区上野
「たからばこ」システムにおける、データベースの改善に関する詳細について(株)CMSコミュニケーションズの担当者との打ち合わせ。

☆平成27年12月8日(火) 18:15～
(杉本、鳥原、校長、教頭、学校教育課長、補佐) 旭小学校
旭小学校における情報教育への協力についての話し合い。

☆平成27年12月9日(水) 15:00～ (杉本、鳥原、堤、布山、大輪) 美術棟
今後の「たからばこ」の取組みについてプロジェクトメンバーにおいて打ち合わせ。

☆平成27年12月22日(火) 13:00～ (杉本、鳥原、布山、大輪) 本学2401教室
データベースシステムの改修内容について確認、検証及び、今後の改善に関する詳細につい

て(株)CMSコミュニケーションズの担当者との打ち合わせ。

☆平成28年2月28日(金)～29日(土) (杉本、鳥原、布山、大輪) 兵庫県西宮市

「たからばこ」システムにおける、データベースの改善に関する詳細について報告・説明、前年度の『さつき展2015』における作品を基にしたムービー作品についての説明、更に著作権研修フォーラムについて上田由紀子さんと打ち合わせ。

☆平成28年3月27日(土)～28日(日) (杉本、鳥原、堤、布山、大輪、上田由紀子さん、学校教育課の小俣覚さん)

『カンファレンス ーたからばこ作戦における著作権についてー』

会場：東京藝術大学、東京駅八重洲口田中ビル会議室

3/27：東京藝術大学の先端的高精度文化財複製研究(COI)において3D複製現場において担当者から文化財複製の作業現場の見学と著作権に関わる説明を受ける。

3/28：講師・助言者として東京大学の生貝直人先生をお迎えし「たからばこ作戦」の今後と著作権に関わる取組みについてのカンファレンスを実施した。

3. 平成28年度における活動予定

- ① 旭小学校における無線LANシステム・タブレットの活用
- ② 旭小学校へ3Dプリンターを持ち込み、子どもたちとの交流を図る
- ③ たからばこ作戦の実践

(文責：杉本光司)

Ⅱ－2－4. 地域美術教育

【27年度の活動概要】

本年度もこれまで同様、本学図工・美術教室の教員と学生で地域の美術教育活動に参加、支援を行うと共に、本学の教育活動にフィードバックすることを期待して関係者と意見交換や情報共有を行った。

主な内容はこれまで通り、「たからばこ作戦」を中心に「宝保育所造形教室」、「谷村第二小学校陶芸講座」等の活動を行った。

本年度のトピックスとしては、宝保育所造形教室で子どもたちが製作した作品を市立図書館に展示した「てんてん」と、同保育所で本学学生が行った公開制作『「巨大カボチャ」ハロウインの飾り制作・展示』がある。これは、今後、本活動が保育活動へ広がることを期待できるものであった。

また本年度より、地域特別支援教育と共催した「クロボ」におけるアート活動に参加した。これはインクルーシブな地域社会づくりといった意味においても大変意義深い活動であった。これらの詳細は本学の「地域交流研究センターブログ」をご参照いただきたい。

表紙の写真は、アート活動で制作した作品である。

【活動の状況】

6月29日(月)	造形活動「てんを描く」	宝保育所	鳥原、布山、 学生4名
9月18日(金) ～20日(日)	「てんてん」企画運営	都留市立図書館2階	鳥原、布山、 学生1名
10月17日(土)	谷村第二小学校陶芸講座 ータタラ板技法による カップ制作ー企画・運営	谷村第二小学校	鳥原、布山、 磯崎(非常勤講師)、 学生7名
10月28日(水)	「巨大カボチャ」ハロウィンの飾り制作展示 「てんてん展示会 at 宝保育所」展示作業	宝保育所	鳥原、布山、 学生4名
10月29日(木)	学童保育活動とたからばこ作戦についての 意見交換	盛里地区学童保育会 旭にこにこクラブ	鳥原、堤、盛里地区 学童保育会事務局
11月14日(土)	クロスボーダープロジェクト アート活動	図工・美術棟	鳥原、堤、布山
12月8日(火)	旭小学校における情報教育支援について 打ち合せ	旭小学校	鳥原、杉本、校長、 教頭、学校教育課長、 学校教育課長補佐
12月9日(水)	たからばこ作戦第5回打ち合わせ	美術研究棟	鳥原、杉本、堤、 布山、大輪
12月19日(土)	クロスボーダープロジェクトアート活動	図工・美術棟	鳥原、堤、布山
12月22日(火)	データの受け取りと取り扱いについて	旭小学校	鳥原、国利先生
1月30日(土)	クロスボーダープロジェクトアート活動	図工・美術棟	鳥原、堤、布山
2月3日(水)	クロボ展示会「みて！！わたしのねんど展」 企画・展示	本学1号館1階 ロビー	鳥原、堤、布山、 学生6名
2月19日(金)	造形活動マープリング体験	宝保育所造形教室	竹下、学生5名

【28年度に向けて】

上述の通り、本年度も昨年度同様、盛りだくさんで充実した活動となった。徐々にではあるが学生の参加も増え、学生が主体的に企画・運営する場面も見られた。また、こういった活動を卒業論文のテーマとして取り扱う学生も現れた。このように、本活動が本学学生にとって、地域の美術教育に関わりながら、図画工作のみならず、子ども理解や人格形成についても好ましい成果を上げていると感じている。

一方、地域からの様々なニーズが高まる中で、本活動に関わる教員の拡充が必要となってきた。また、試行的にクロボのアート活動を本学図工・美術棟で行ってみたが、これに関わる教員、学生の特別支援教育に関する知識の不足や、施設の見直しなどの課題も見えてきた。

このように、地域の美術教育にかかわりながら研究活動が深まるとともに、おぼろげながら課題も浮かび上がってきた。これを踏まえ、これらに対する検討を来年度の課題としたい。

(文責：鳥原正敏)

Ⅱ－２－５．地域特別支援教育

1. 地域特別支援教育の目的

地域特別支援教育は、特別なニーズのある子どもたちの教育・福祉の支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを目的として、2015年4月に発足した新分野である。2015年度に行った主な活動は以下である。

- ① 知的障害・発達障害のある子どもたちを対象にした週末の居場所づくりの活動
- ② 思春期・青年期の発達障害の子どもたちを対象にしたキャリア学習活動
- ③ 一般市民や現職教員向けの障害理解研修
- ④ インクルーシブな地域づくりの啓発イベント

2. 活動の内容

初年度ではあったが、①～④についてまんべんなく活動を展開できた。以下では、個々の活動の内容について簡単に示すことにしたい。

① 知的障害・発達障害のある子どもたちを対象にした週末の居場所づくりの活動

これは、「クロスボーダー・プロジェクト（CROBO）」という活動である。「健常者と障害者の境界（ボーダー）を超える」という意味で名称を「クロスボーダー」とし、かつそのプロセスとして地域の方々と「コラボ（連携）」してやっていきたいという意味で通称を「クロボ」とした。

2015年度は、4月25日、5月23日、6月27日、7月25日、11月14日、12月19日、1月30日の計7回（10月の回は欠席者が多く中止）、土曜日の10：00～15：00に大学の施設で実施した。参加する知的障害・発達障害のある子どもメンバー（小・中・高生）は基本的に1年間固定で、今年度は12名が参加してくれた。活動の中では、口話・手話（ジェスチャー）・絵カードなどの多様な言語・非言語的コミュニケーションを意識的に使用することで、コミュニケーションをバリアとしない環境づくりをこころがけた。毎回、平均15名ほどの学生や市民がボランティアとして参加し、のべ人数では、80名を超えるボランティアが関わってくれた。

クロボは、午前が全体活動、午後がグループ別活動としており、2015年度は初年度ということもあって、いずれの活動でもいろいろと試行錯誤を行った。振り返ってみると、午前の全体活動ではスポーツ活動を、午後のグループ別活動ではアート活動と言語活動を行うことが多かった。後期から、スポーツ活動については、知的障害スポーツのNPO法人である「スペシャルオリンピックス日本・山梨」、アート活動については、地域交流研究センター地域美術教育分野と協働をはじめ、活動内容の質が格段に向上した。

② 思春期・青年期の発達障害の子どもたちを対象にしたキャリア学習活動

これは、「キャリアデザインワーク」という活動である。2014年度末に、山梨県立こころの発達総合支援センター・就労支援ワーク実行委員会の関係者から打診を受け、地域特別支援教育分野を中心に、郡内地域の発達障がいの中高生を対象にした都留版「就労支援ワーク」を

開発していくことになった。そもそも、「就労支援ワーク」とは、平成19年に国中地域で立ち上げられたもので、夏休み期間に模擬的な就労体験を通して労働の意義や仕組みについて学び、自分の適性について考え、将来イメージを形成するといったことを目的とするプログラムである。

これまでの「就労支援ワーク」をそのまま導入するのではなく、都留文科大学に合う形にリボンすることを念頭におき、運営委員会を結成した。委員会は、本学非常勤講師の原まゆみ先生をはじめ、「障がい者就業・生活支援センターありす」と「天使のおもちゃ図書館はばたき」の担当者、地域特別支援教育分野担当教員の堤、「障がい者のキャリア支援」に関して研究している学生たちなどで月1回開催した。話を進める中で、都留文科大学では「キャリアデザインワーク」として、また、単に個人の発達保障だけでなく、都留市のインクルーシブな地域づくりとも連動させていく方向で開発していくことになった。今年度は、4名の中高生を対象に、2日間開催した。活動の中身は以下である。

<1日目(11月14日土曜日の午後)>

導入学習として「お金を使う人(消費者)としての自分をふりかえる」というワークを行った。「保護者から15万円をもらったら何につかうか」を考え、模造紙にまとめた。

<2日目(12月19日土曜日の午前)>

グループに分かれ、ちょっとしたインターン(職場見学・体験)に行った。中学生は「都留市曾雌にんにく生産組合」へ、高校生は「佐野印刷」と「ナカムラ薬局」に行った。

<2日目(12月19日土曜日の午後)>

それぞれのグループでのインターンを報告し共有したあと、あらためて、導入学習で行ったワークを行った。ただし、前回とは設定が異なり、今度は「1人で生活することを考えて15万円を何につかうか」について考え、模造紙にまとめた。最後のまとめでは、「お金をつかうこと」と「お金をかせぐこと」の循環についての気づきを促し、それを踏まえて「今の自分の生活の中でなにを意識してやっていこうか」ということを言葉にした。

③ 一般市民や現職教員向けの障害理解研修

障害理解研修として、2015年7月25日(土)14:00~16:00に、1号館215教室において、「知的障がい教育におけるコミュニケーション指導-マカトン法を通して-」という公開講演会を開催した。東京都練馬区にある旭出学園教育研究所の主任研究員及び日本マカトン協会代表の松田祥子先生を講師にお迎えし、知的障害の子どもの「声」をはぐくむことの意義と、そしてそのツールとして、補助代替コミュニケーション法の1つであるマカトン法について講演いただいた。マカトン法とは、発語や表出に課題のある子どもたちのためにイギリスで開発された口語とハンドサイン(手話)と描画シンボルを用いるコミュニケーション指導法で、世界40ヶ国以上で使用されている。また、知的障害のある子どもの教育場面だけでなく、一般の小中学校や福祉・看護の場面でも広く用いられ、最近では、乳幼児用のベビーサインとしても活用されている。

当日は、60名ほどの参加があり、大盛況であった。地域の方々だけでなく、多数の現職教員や学生が参加してくれた。講演にはサイン実技も含まれており、貴重な学びの機会になった。アンケートには、「とても勉強になりました。ジェスチャーを入れて言葉を使用することで、イメージと言葉が結び付きより子どもが理解を深めることができました」と「実

践等を踏まえており、特別支援学校の現場だけでなく、ほかの場でも工夫次第で活用できるのではと感じた」といった感想があった。

④ インクルーシブな地域づくりの啓発イベント

インクルーシブな地域づくりの啓発イベントとして、2016年1月27日(水) 18:30~21:00に、都留文科大学の体育館において、「障がい者スポーツ”から”ユニファイドスポーツ”へーフロアホッケー体験を通してー」というワークショップを開催した。“ユニファイドスポーツ”は、知的障がいスポーツの国際団体である「スペシャルオリンピックス(SO)」がすすめているもので、知的障がいのある個人と知的障がいのない個人が、いっしょにチームメイトとして取り組み、その活動を通じて、障がいの有無に関わらず全ての人がその人らしく生き生きと暮らせる「インクルージョン(包摂)」をめざそうというものである。平日の夜ということもあって、学生が中心ではあったが、都留市内の障害者福祉関係の指導員や、学童の支援員、フリースクールの高校生、スペシャルオリンピックス日本・山梨のコーチなど25名の参加があり、大盛況で終えることができた。

3. 2015年度の活動の総括

初年度にも関わらず、幅広い活動を展開することができた。また、多くの学生や地域の方々に関わっていただけたことで、地域特別支援教育分野の存在を、広く周知することができた。さらには、地域交流研究センターのブログとは別に、地域特別支援教育分野独自のブログを立ち上げ、定期的に更新してきたことによって、地域を超えた人々にも当分野に関心を持っていただくことができた。

一方で、担当教員が1人という環境の中で、2015年度に展開したような幅広い活動を毎年維持していくことの大変さを実感している。幸い2016年4月には、障害児心理学の研究者が教授として初等教育学科に着任し、地域特別支援教育分野にも関わっていただくことになっているし、クロボの活動については、2015年度後期から、スペシャルオリンピックス日本・山梨や地域美術教育分野との共同事業へと発展してきている。また、キャリアデザインワークについても、2016年度は、本学非常勤講師で山梨県の元特別支援学校長である原まゆみ先生に加え、県立ひばりが丘高校ややまびこ支援学校、フリースクールオンリーワンなどの関係者が運営委員会に参加してもらうことになっている。2016年度も、2015年度と同様の4つの活動について質を落とすことなく展開したいと考えているが、一層、「連携・協力」を進めチームワークを高めることによって、担当教員の過重負担の軽減にも取り組んでいきたい。

(文責：堤 英俊)

Ⅱ－３．暮らしと仕事部門

1. 2015年度の活動概要

暮らしと仕事部門は担当者不在のため2013・2014年度の活動を休止していたが、2015年4月より社会学科の福島万紀とCOC推進機構の内山美恵子が新たに担当者として任命されて活動を再開した。活動は担当者の専門性と大学周辺地域の地勢を活かして、「都留市を流れる水と暮らしと農のかかわりを探るプロジェクト」と設定し計画を立案した。大学周辺の東桂地域には富士山の溶岩中を流動し、その末端から湧き出す湧水帯が形成されており、住民はこれら湧水を飲料水はもとより、農業や魚の養殖、工業用水として古くから利用している。東桂地域では湧水量の多い地点を中心に、湧水と水路の保全活動を行ってきたが、その水質や保全活動が評価されて「十日市場・夏狩湧水群」として2008年に環境省が指定する平成名水百選に選定された。しかし、この湧水も地元住人の話では以前に比較すると湧水量が減少している、とのことであるが、東桂地域における包括的な水調査事例が乏しく、具体的な状況は把握できていない。したがってこのプロジェクトでは、湧水の潜在的賦存量と利用量の最適なあり方や、湧水の取水と排水管理について着目し、地域における湧水の持続的利用にむけた課題を提示することを目的として計画を策定している。なお、プロジェクトの実施には、地域交流研究センターの地域交流研究教育プロジェクトで採択された「都留市十日市場・夏狩地区における桂川を中心とした水環境の経年変化の把握」（代表者：内山美恵子）での研究成果も取り入れて進めている。

本年度はその初年ということで、対象地域に関する予備調査と研修会を実施した。

2. 活動の状況

(1) 東桂地域の予備調査

本調査は具体的な計画を策定するのに必要な調査地域の現状把握を目的として実施した。まず、都留市より提供を受けた都留市都市基本図（縮尺1/2,500）を用いて東桂地区の水路図を作成し、それに基づいて水路と土地利用状況の概査を実施した。そのうえで、地下水を胚胎する桂溶岩の末端部に位置する、十日市場の永寿院敷地内にて水圧式自記水位計を1器設置し、2015年10月から湧水よりなる水路の連続観測を実施した。また、水位から流量へ変換するためのH-Qカーブを得る目的で、流量観測を月に1～2回実施し、併せて水質分析用試料を採水した。

(2) 暮らしと仕事部門研修会の実施

都留市東桂地域の水利利用および水環境の現状と課題を知ることを目的とし、学生を対象とした研修会を2015年12月10日（木）に都留文科大学コミュニティホールで実施した。講演は「水が育む潤いある生活を守って－都留市東桂地区の活動から－」と題して、「十日市場・夏狩湧水を守る会」の会長である水庭次男氏にいただいた。主催者を除く参加者は24名（内訳：学生16名、教職員5名、一般市民2名、不明1名）であった。

講演では守る会としては格別な活動はしていないとしながらも、湧水を上水道として使用している地域のこと、毎年4月初旬に東桂地区の住民参加により行われる「定式」と呼ばれる川

の清掃作業や住民のボランティアで年に2～3回実施している水路の取水口の土砂さらいのこと、さらには水環境のみではなく遊歩道周辺の草刈りなど地域全体の環境保全活動をしていることなどが紹介された。その活動を通して見えてきた問題点として、河川に投棄されるゴミや生活・産業形態の変化に起因する水路の水の水質汚濁があげられた。問題解決にむけて、河川流域のゴミに関する問題は上下流全体で取り組む必要があり、その仕組みをいかにして構築するか、また、水庭氏が居住する十日市場エリアを流れる水路の水を直接飲めるほどの清流にするためにはどのようなプロセスが必要か、など水庭氏のこれまでの経験に基づいた考えが紹介された。講演後は参加者から、定式に取り組む人に関して、湧水の水量や水質の変化について、地球温暖化と湧水との関連性について、水をきれいにするための周辺地域へのアプローチについて、などたくさんの質問が出され、聴衆の関心の高さが伺われた。以下に、アンケートに記入された記述をいくつか紹介する。

- ・授業などでは水の水質や浄化槽などについてやっていましたが、それ以外にもシステムのことや権利のことなど、授業ではきくことのなかった話まできくことができたのでよかったです。私は都留にきて、桂川とか、遊べるきれいな川がある一方、道に流れる水は下水のにおいがしたり、川にごみが多くおちていたり、水のまちでもあって、実際に豊富できれいな水があるけれど、やはり昔にくらべたら水を取りまく環境が悪く変わってしまったらんだな、と思います。（大学1年生）
- ・十日市場周辺の川、湧水について、水質や長年続けられてきた活動などについて知ることができた。また、活動を起こす際の仕組みについても聞くことができて、プロジェクト研究に活かしていきたいと思った。（大学1年生）
- ・「分析はまず、なにか壊すことから」この言葉が私はとても印象的でした。そのものを真に受けるのではなく、自分たちでもう一度考えてから具体化する。私も研究をつづけていくうえで参考にしたいと思います。まだまだ水に関しての知識は少ないため、今後しらべたいです。（大学1年生）
- ・じっさいに湧水のそばで暮らしているかたのおはなしということで説得力がありました。私の実家は東京の東久留米市で、同じく湧水が自慢の市です。でも、お話にあった湧水の扱いとは異なり、大切に保護されると同時に子どものあそび場になっています。その土地によって、こんなにも変わるものなんだなと思いました。どちらも人々の暮らしのすぐそばにある、というところは共通しているなと思いました。川の清掃や草刈りは、人数が多い方が力も強いだろうと思いました。だから、学生からボランティアとしてつづってもらえば、参加する人は増えると思います。アプローチのしかたがいろいろあるというのがとても印象的でした。川をきれいにしよう、大切にしよう、としている人がいるということをもっと地域の人に知ってもらう機会が増えたら、川（湧水）に対する意識も変わってくるのかもしれない、と思いました。（大学2年生）
- ・川を守っていくにも、やみくもではいけないのだなと思った。水の権利を考えなきゃならないし、人手もいる。それに、川は一本でつながっているということを痛感しました。（大学2年生）

- ・台風の影響はそれほど大きいのでしょうか。お話の中で、台風という言葉が何度かあったので気になりました。すぐ身の周りにある「水」を量や質という視点から見るということがなかったのが、新鮮でした。瞬間ではなく、長期的に見ていかなければならない、研究対象なのだということを感じました。4年で入れかわる学生がどう関われるのか、考えさせられます。（大学3年生）
- ・地域の在住者として、水環境のことを考えて頂いている地元の方がおられること、とても力強く感じました。下水のたれ流しはとても悲しく、早期解決が必要だと思っています。具体的な問題解決への道すじをわかりやすくお話し頂きよかったです。地元に住んでいても、水の流れ方などのことは知る方法がわからなかったのがよかったです。（大学職員）
- ・十日市場地区に住んでいる一人として、「水」をめぐる生活について改めて考えていく必要があると思います。今日はその良いきっかけとなりました。（大学教員）

3. 2016年度の活動計画

2015年度は、都留市都市基本図（縮尺1/2,500）の地形図から桂川水系の水の流れを読み取り、データ化した。2016年度は地図データから得られた資料をもとに、現地のフィールドワーク調査を行い、湧水の分布地点とそれを水源とする水の利用形態（暮らしや農業への利用）について探索する。

(1) 現地調査

- ・湧水量調査（2015年度からの継続調査）、水質測定、水理地質踏査、水利用形態調査

(2) 視察調査

- ・湧水の持続的な利用についての先進的事例について、視察調査や資料・文献調査を実施する。

(3) 事業予定

- ・研修会：地域内外の講師を都留文大に招聘し、事例報告をしていただく（1回）
- ・公開講座：当地域の湧水についての基礎を学ぶ講座を実施する（2回）

（文責：内山美恵子・福島万紀）

Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ-1. 第11回地域交流研究フォーラム

第11回地域交流研究フォーラム 『地域交流研究活動 — SAT活動をふり返って —』

○平成27年12月12日(土) 於：2102教室 参加者：36名(登壇者含む)

○プログラム

はじめに 13:00~13:20 開会の挨拶と趣旨説明

第一部 13:20~14:10 SATのはじまりと変遷

第二部 14:20~14:50 SATの現状報告と今後の可能性

おわりに 14:50~15:00 閉会の挨拶

○概要

本フォーラムは、SAT活動のこれまでを振り返りつつ、改めてその概念と意義について確認するとともに、これまでの成果を共有しながら今後の可能性について探るものであった。

SAT(学生アシスタント・ティーチャー)は本学独自の発想による活動で、平成17年度より地域交流研究センターの事業の一つとして始まり、その後Aタイプ・Bタイプ・Cタイプへ発展、これをベースに、現在では「教科または教職に関する科目」と「教職に関する科目」へ発展してきた。その後、教職支援センター設置に伴い、平成28年度から全てのSAT活動の運営は、地域交流研究センターから教職支援センターに移管された。

こういった経緯を踏まえ、本フォーラムの第一部では「SATのはじまりと変遷」をテーマとして、佐藤隆先生(初等教育学科教授)と杉本光司先生(元地域交流研究センター長)、勝俣武男先生(元キャリアサポートセンターSAT担当)からお話を伺った。

第二部では「SATの現状報告と今後の可能性」をテーマとして、亀田孝夫先生(教職支援センター特任講師)からご報告を頂いた。これを受けてフォーラムにご参加頂いた小・中学校の先生方から、現場の様子や今後期待することなどについてご発言いただいた。また、宮下聡先生(本学教職支援センター特任教授)と山崎隆夫先生(本学教職支援センター特任教授)からご発言をいただいた。

本フォーラムで多くの方々から直接、黎明期の様子やSATへの想いを伺えたことは大変意義深いものであった。また、SATについて我々主催者と参加者の理解がより深まり、その意義を共有できたと感じている。

なお、当日の様子について「地域交流研究センター通信27」46・47ページと、当年報前半部に報告を掲載しているので、是非、ご高覧賜りたい。

(文責：鳥原正敏)

Ⅲ－２．各種講座の開催

(1) 都留文科大学現職教員教育講座

〈講座の趣旨〉

テーマ：『教師の子ども理解と学習指導』

現在、日本の子どもたちの学力をめぐるのは、さまざまな角度から「問題」とされておりま
す。とりわけ、子どもの読解力をどうつけるのか、そして子どもの算数・数学嫌いをどのよう
に克服していったらよいかをめぐるのは議論の中心になっているとよいと思います。
しかし、残念なことに、これらのテーマを十分に研究・検討する前に「学力向上」対策が、そ
れぞれの学校や教師に求められているのが現状であるといわざるを得ません。

今回は以上をふまえ、一人ひとりの子どもを理解することをベースに、子どもの思考や感情
・感覚に即した学習のあり方を探ることとしたいと思います。特に、学校での生活の大部分
を占める授業の場面で、子どもを支える学習指導のあり方を深めていくことを追究したいと思
います。

(大学HP開催情報ページより抜粋)

日 時：平成27年7月27日(月)、28日(火)

場 所：都留文科大学 2号館2202教室

主 催：都留文科大学地域交流研究センター、教職支援センター、
初等教育学科

日程と内容

【第一日目】7月27日(月)

会場：2号館2202教室

9:30～10:00	受 講 受 付 (本学2号館)
10:00～12:00 (参加者：32名)	『思春期の子どもと向き合う教育実践』 講師：宮下 聡 (都留文科大学教職支援センター特任教授) 内容：日々の教育活動で、子どもが愛おしく思えなくなるときがあ ります。そんな思春期と向きあう教師に求められている「目 線を変えてものをみる」ことの大切さを考えます。
13:00～15:00 (参加者：33名)	『教科に関する研究講座Ⅰ』－子どもがわかる授業を作る・国語－ 講師：春日 由香 (都留文科大学初等教育学科准教授) 内容：国語の能力を育成するために、どんな教材を選定し、どんな 言語活動を設定したらよいかを、「模擬授業」を通して検討 します。

10:00～12:00 (参加者：40名)	『子ども理解と学習指導』 講師：山崎 隆夫（都留文科大学教職支援センター特任教授） 内容：子どもに寄り添い支えるとはどういうことなのかを考えるとともに、その手立ての中心となるべき学習指導のあり方を実践的に検討します。
13:00～15:00 (参加者：38名)	『教科に関する研究講座Ⅱ』－英語を楽しむ授業をつくる－ 講師：上原 明子（都留文科大学初等教育学科専任講師） 内容：本講座では、外国語活動における意味のやりとりの大切さについてお話しし、それを重視した単元構成や活動例、教材の工夫等について具体的に紹介します。

(文責：鳥原正敏)

(2) 都留文科大学子ども公開講座

都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業と本学の市民公開講座を連携させた「子ども公開講座」は平成25年度から本格的に開始された。対象となるのは、放課後子ども教室に参加している市内の小学生で、夏休みや冬休みに、主に大学内で開催されている。

平成27年度は6つの講座を開催した。その開催状況は次の通りである。

平成27年度子ども公開講座参加人数一覧

開催日	テ ー マ	講 師	参加者数
8月7日	Hello! 英語でワクワク	奥脇奈津美 教授	25名
8月10日	楽しく走ろう！Run, Run, ラン！	麻場一徳 教授	29名
8月12日	留学生と遊ぼう！	小林文子 専門員	34名
8月23日	富士山の中の水の旅	内山美恵子 特任教授	17名
12月5日	ムササビに会いに行こう！	北垣憲仁 特任教授	15名
1月5日	読み聞かせから読書の楽しさを	寺川宏之 教授	30名
合 計			150名

※参加者数には、保護者・留学生を含む

なお、「富士山の中の水の旅」の講師としてご担当して頂いた、内山美恵子先生による記事が「地域交流センター通信27号」42ページに掲載されている。

また、「ムササビに会いに行こう！」と「読み聞かせから読書の楽しさを」については、地域交流研究センターブログで紹介されている。

来年度も都留市教育委員会からの要望に応じて、様々な講座を開催する予定である。

(文責：事務局)

(3) 県民コミュニティーカレッジ講座

講座名：『映画で学ぶ欧州小国の歩み』

会場：都留文科大学 2号館 2102教室

講師：山口 博史（本学COC推進機構准教授）

講座内容：

- | | |
|--|-----------|
| 【第1回】11月8日(日曜日) 午後1:00~2:30
ベルギーと「尼僧物語」(前半) | 受講者：23名 |
| 【第2回】11月8日(日曜日) 午後2:40~5:15
ベルギーと「尼僧物語」(後半) | 受講者：23名 |
| 【第3回】11月14日(土曜日) 午後1:00~2:30
ベルギー独立~世界大戦の時代 | 受講者：17名 |
| 【第4回】11月14日(土曜日) 午後2:40~4:10
戦後のベルギー | 受講者：17名 |
| | 受講者合計：80名 |

講座のねらい：

人文学、社会科学、自然科学を問わず、近年、研究で得られた知見をどう社会に還元していくかがしばしば問われている。地域交流研究センターの活動は、こうした社会の要請にこたえようとするものである。とはいえ、当初から社会の要請にこたえることを意識しての活動と、研究上の問題関心（つまり、先行研究の動向に規定される）のもとで行なわれる活動では、社会の要請にどうこたえていくかについて方法上の違いが出てこざるをえない。研究上の問題関心をつきつめていくことによって得られた知見は、専門のアカデミック・コミュニティに向けての発信をまずは意識する。これを社会に向けて発信していくときには、アカデミック・コミュニティの構成員とは受け手が違うことを意識した工夫が必要となる。

今回の県民コミュニティーカレッジ「映画で学ぶ欧州小国の歩み」はこの工夫の一つの試みだった。筆者は、科学研究費（課題番号25780308（若手研究B））の補助を受けて、ベルギーのブリュッセル周辺地域の蘭仏語話者混住地域の研究に取り組んでいる。得られた知見は、この問題に関心がある専門家には興味深いものだろう（すくなくとも筆者はそう期待する）。しかし、ふだん多言語地域の状況にふれる機会がなかったり、ベルギーという国に特段親しんでいるわけではない人にとっては、筆者が現下取り組んでいる研究の意義を理解しにくいのは想像に難くない。

研究知見の社会への還元にはそれほど頓着せず、超然として研究を進めていくという立場もあるにはあるだろう。ただ、現代はそうした時代ではなくなりつつある。個々の研究が直接的な短期的「有用性」を発揮すべきかどうかは判断を保留するとしても、その内容を親しみやすい形で紹介し、知的探求の喜びや苦しみ（じっさいにはこちらの方が多い）を多くの人と共有していくのは意義のあることだ。それによって研究者がふだん何をしているのか、ありのままの姿を理解しやすくなるからだ。

そのため、公開講座ではA. ヘップバーン主演「尼僧物語」（舞台はベルギーのブルッヘおよび現在のコンゴ）を題材として取り上げ、ベルギーの歴史・文化にかんする解説を加えながら、参加者からの疑問にできるだけこたえていくという方式をとった。またそれを敷衍して、

現在筆者が取り組んでいる研究上の問題についてもできる限り紹介し、その意義を説明するようつとめた。正直なところ、細かな研究上の話題については、聴衆にどれほど関心をもってもらえるか講座が始まるまで不安がぬぐえなかった。しかし、参加者の関心は高く、手ごたえを感じる事ができた。ここですべてを取り上げることは割愛するものの、好意的な反応とならんで、筆者が自分の専門分野の知見を語る姿が楽しそうだった、など研究を続けていてよかったと実感するコメントも頂戴した。

国内他大学では、一定以上の大型外部資金を獲得したときに公開講座実施が義務付けられるケースもあると耳にする。そうした公開講座の制度化にも一定の意義はある。ただ、制度化により受け身の姿勢が誘発されやすいことにも留意しておきたい。今回の企画を通して、外部資金による研究に取り組んでいる研究者自身のイニシアチブによる「下からの」、「ボトムアップ型」公開講座企画もあって良いのではないかという意を強くした。この方向性を追求していくことで、研究者と社会の間にいつそう幸福な関係をつくっていくことにつとめたいと願うものである。

(文責：山口博史)

Ⅲ－３．『地域交流センター通信』の発行〔第27号〕

1. 本年度の概要

『地域交流研究センター通信』は、1号を2003年5月に発行し、2014年度までに26号を発行した。2013年度までは年2回発行していた（センターの事業の日程が後期に集中するため毎年12月と3月に発行せざるを得なかった）が、2014年度からは年1回の発行とし紙面をオールカラーとした。本誌には、本学の地域交流の実践を記録として残すだけでなく、諸実践に参加した教職員・市民と誌面を通じた交流を促す重要な役割を果たしている。本年度もオールカラーで第27号を発行した。

2. 体裁

本誌は、A4版、オールカラー48頁で4,000部発行した。2015年度卒業生および2016年度入学生にも配布した。配布先は下記資料の通りである。

地域交流研究センター通信配布先

第27号

H27年度 2016.03.14発行

配 布 先	部数	配 布 先	部数
執筆者	40	都留市役所	80
センター事業協力者及び団体	36	都留市議会事務局	20
大学内	195	都留市内施設	213
教職員	340	県内施設	7
卒業生	800	県内教育委員会（28市町村）	56
入学生	900	東部富士地域小中学校	63
名誉教授	48	県内高校	42
同窓会	70	県内支援学校	11
畑先生	100	県内大学	21
大田先生	20	各公立大学 地域交流センター	83
フィールド・ノート同梱用	200	山梨ことぶき観学院	90
来校者及び希望者配布用	435	南都留地域教育推進連絡協議会	130
配 布 合 計			4,000

3. 内容

巻頭文は長野県佐久市多津衛民芸館館長をされている吉川徹氏に執筆していただいた。地域での学習と実践の重要性が具体的に記され、センターの今後の展開に重要な視点を与えてくださった。センターの巻頭文にまさにふさわしい内容といえる。部門の活動として「発達援助部門」、「暮らしと仕事部門」、「フィールド・ミュージアム部門」の諸実践と参加した学生・市民の感想を掲載した。さらにセンターの教養科目、地域交流研究教育プロジェクトをとりあげた。トピックスとして「学級づくりの向上をめざす実践講座」、「文大名画座」、「子ども公開講座」をとりあげ、地域交流研究センターのサテライトの取り組みを紹介した。最後に第11回地域交流研究フォーラムについてまとめた。

4. 今後の展望と課題

『地域交流研究センター通信』は発行部数も多く、センターの諸実践を記録し幅広く共有する機能を果たしている。台割りは編集担当であるセンターの教職員で決め、校正を小委員会で行った。校正など発行までの作業をなるべく軽減していくにはどうしたらよいかなどを検討し、継続した発行を心がけたい。

(文責：北垣憲仁)

Ⅲ－4. 学部共通科目の開講

(1) 「地域交流研究Ⅰ」－ 地域交流から得た知見を普遍化するためには どうすればよいか？*－

地域交流にはさまざまな活動がふくまれます。また活動が行なわれる場面も多岐にわたります。活動をあらわすために用いられる言葉は、それぞれの場面で臨機応変に多義的に用いられることが少なくないものです。実践上は、そうした状況に対応していくことが求められることもあるでしょう。とはいえ、大学では地域交流の活動を学習・研究につなげていくことが求められます。そのためには、活動・実践の場で用いられる言葉が、学問的にはどういった背景のもとにあるかを知っておくことが有益でしょう。地域交流の現場で出会う言葉を、普遍的な文脈の上で理解することで、それぞれの個別の体験を、日本だけでなく世界で同じように活動に取り組む人々と共有することができるようになるからです。

地域交流研究Ⅰは、そうしたねらいのもと、今年度(2015年度)に開講された講義です。講義では、地域交流の現場でよく出会うと思われる言葉をピックアップし、それぞれの言葉の学問的背景を解説していくことに力点を置きました。授業で解説を加えた言葉としては、「コミュニティ」、「住民」、「市民」、「自治会・町内会」、「まちづくり」、「NPO」、「RCA (Rotating Credit Association、山梨ふうに言うなら「無尽」)」、「ネットワーク」、「ソーシャル・キャピタル」などがありました。その他、贈与や交換にかんする諸問題についての解説、水環境の

* 本稿は都留文科大学地域交流センター通信27号(平成28年3月14日刊)所収(p.32)の記事を転載したものである。

問題、グローバル化と地域生活についての現代的状況についても解説を行ないました。

解説した言葉のうち、とくに「RCA（無尽）」については、少なからず反響がありました。受講者が山梨県や長野県出身者で、もともとRCAの存在を知っていたり、アルバイト先の飲食店で「無尽会」（それが何を指すのか詳しくはわからなかったにせよ）というものがあることを知っていたところに、その学問的背景について解説が行なわれたことによるものでしょう。受講者が、RCAは日本だけではなくアジア、そして遠くアフリカでも見られるものだというのを学んだことで、都留をはじめ山梨の文化と世界のつながりを感じられるものとなったように思います。

今年度は最初の開講であったため、手探りの部分も多くなりました。来年度は今年度得たフィードバックを活かして、より地域交流の実践上意義のある講義を展開できるようにしていきたいと思います。

（文責：「地域交流研究Ⅰ」担当 山口博史）

（２）「地域交流研究Ⅱ」－生きもの地図をつくる－

地域交流研究Ⅱでは、2011年より前期に「生きもの地図をつくる」をテーマに、身近に見られる生きものの分布調査を実施している。定量的な調査をおこなうことで、季節の変化にもなう生きものの動態を把握し、ここで得られた情報を地域に公開する手法を学び、生きもの地図が地域交流に果たす役割を考察することが授業の目的である。

2015年は受講生の人数調整をおこない、30名ほどでツバメ、イワツバメ、スズメ、ハルゼミ、カエル類の調査を実施した。6班（1班は3～7名ほど）にわかれて調査をするが、例年、事前に用意した簡易図鑑を配布し、生きものに詳しくない学生にもデータが取れるように配慮している。生きもの地図を作るにあたっては、対象とした種の識別とその生きものがいつ、どこに、どのくらいいたのかを把握することが重要になる。種名が不確かで数量的な記録を伴わないデータは情報が乏しい。そのため、調査対象の種を正確に識別し、個体数を記録することが重要である。

この授業では野外に出て調査をすることに重きを置いている。生きものに関する知識は、本やインターネットを介して、室内に居ながらにして触れることができるが、自分の足を使って得た情報はとても大事で、直接的な多くの学びはこのような経験のなかにあると考えるからである。受講した学生には、大学周辺の身近な自然に触れ、その意味を考える時間を持ってもらいたいと願っている。

調査をおこなった後はまとめをして、班ごとに1枚のパネルを作製する。ここで作製したパネルは、都留文科大学前駅の待合室に展示し、その成果を広く公開することに努めている。調査、まとめ、パネル作製という一連の作業をこなすことで、調査対象を知り、調査結果から明らかになったことを理解し、その成果を公開することには、どのような意味があるのだろうか。自分たちがおこなった調査から得られた情報を多くの人々に知ってもらうための工夫の仕方、その楽しさ、重要さに気づいていただけたら幸いである。

2015年はツバメ類の調査のさい、水田・畑・草地・未舗装地面の面積も調べた。これら4つの環境とツバメが繁殖をおこなった巣の数の関係をみると、水田面積と巣の数には正の相関

があった。また、未舗装地面と巣の数にも正の相関関係が示唆される結果が得られた。カエル類の調査は今回が初めてであったが、トノサマガエルが5箇所の水田で確認された。トノサマガエルは近年、個体数の減少が著しい種であり、山梨県のレッドデータブックでは準絶滅危惧種となっている。今後は、ツバメ類やスズメなどの身近な生きものの調査を継続し、希少種や外来種の分布状況を把握し、その結果を学内はもとより都留市内にも広く公開していきたいと考えている。

(文責：「地域交流研究Ⅱ」担当 西 教生)

(3) 「地域交流研究Ⅲ」－山梨を知り、歩き、その中から自分の課題を見つける*－

地域交流研究Ⅲでは、県内各界で活躍する講師を招いての講義受講、フィールドワークへの参加、1回以上のイベント・ボランティア参加、県へのレポート提出を条件として「やまなし観光カレッジ」修了認定を行ない、修了資格者にそれまでの講義、フィールドワーク、イベント・ボランティア参加から得た発見をもとにレポート作成を求めることで単位認定を行ないます。講義で展開される県内各界の実情にかんする興味深い内容をもとに、受講者がリアクションペーパーを作成し、次回の授業時に世話役(担当：山口)がそこに講評を加えながらこの授業は進行していきました。

2回行なわれたフィールドワークは、両日とも好天に恵まれ、成功のうちに終わりました。参加者からは、どちらの回でも「ひとつの場所にかかる時間が短く、あわただしかった」旨の感想がありました。そのため、解散時や直後の回の授業で「それぞれの学びを深めるため、各自の関心に応じて再訪してほしい」ことを伝えました。その後、再訪の意向を示した受講者もあり、山梨にかんする主体的な学習の機会を提供できたものと思います。

【ゲスト講師を招いての講義】

10月6日 開講式

山梨県の概要と観光振興 ……観光部職員 (山梨県観光部)

10月13日 山梨の歴史 ……萩原 三雄 (山梨県立考古博物館)

10月20日 山梨と富士山 ……中島 紫穂 (山梨県富士山レンジャー)

10月27日 郡内織物の新しい挑戦 ……前田 市郎 (株式会社前田源商店)

11月10日 地域活性 ……赤松 智志 (富士吉田市地域おこし協力隊)

11月17日 都留市の魅力 ……秋山英一郎 (都留市役所)

11月24日 甲州印伝 ……上原 勇七 (株式会社印傳屋上原勇七)

12月1日 山梨のワイン ……長谷 部賢 (長谷部酒店)

12月8日 山梨の果実 ……堀内 圓 (甲斐いちのみや金桜園)

12月15日 『Can you speak 甲州弁?』 ……大堀 卓 (五緒川津平太)

* 本稿は都留文科大学地域交流センター通信27号(平成28年3月14日刊)所収(p.34)の記事を転載したものである。

【フィールドワーク】

11月21日 郡内方面：北口浅間神社、フジヤマ・ミュージアム、山梨県立富士ビジターセンター、山梨県富士山科学研究所、尾県郷土資料館

12月5日 国中方面：山梨県立博物館、笛吹川フルーツ公園、シャトー勝沼、勝沼トンネルワインカーブ・大日影トンネル遊歩道

(文責：「地域交流研究Ⅲ」担当 山口博史)

(4) 「地域交流研究Ⅳ」— 地域の交流誌をつくる —

1. 授業の概要

地域交流研究Ⅳは、フィールド・ミュージアム部門の機関誌である『フィールド・ノート』の実践を活かし、学生が地域の自然や人びとを取材し自ら編集をするという授業である。自ら企画を立て、取材し記事を書くという一連の編集作業を通して完成した小冊子が地域との交流に果たす役割を考察することをテーマとしている。今年で9年目となる。編集という実践的な授業のため、あらかじめシラバスに「少人数のゼミ形式を想定する」と明記し、ガイダンスでもその旨を説明した。授業は全学科・全学年から最終的に20名の受講となった。

2. 授業の感想

本授業を受講した学生からは次のような感想があった。

- ・この授業を受ける前に記事を書いたこともないし、自分の文章にもまったく自信をもっていませんでした。でも受講後、文章に自信がもてるようになりました。
- ・この授業を受けて将来の就きたい仕事について考えを深めることができました。
- ・ふだんの生活にいかせるような学びをありがとうございました。
- ・座学だけでなく、自分で計画して学外でも学べるところがほかの授業とちがってよかった。
- ・記事を書く楽しさを知ることができてよかったです。
- ・相手にわかりやすく伝えるにはどうしたらいいかなど、子ども相手にものごとを教えるさいにとっても大切なことを学ぶことができた。

3. 今後の授業の展開について

少人数で冊子編集をするという実践的な授業ではあるが、企画やインタビュー、記事の校正など一連の編集の内容も多く半期では丁寧な対応が難しく駆け足になりがちである。しかし編集作業を通してできるだけ個人の体験を受講者全員で共有したり、インタビューに応じてくださった市民との交流をさらに深めていったりするなどの工夫をしていきたい。

(文責：「地域交流研究Ⅳ」担当 北垣憲仁)

IV. 地域貢献活動

IV-1. 山梨県南都留地域教育フォーラム

平成27年11月2日に、第18回山梨県南都留地域教育フォーラムが富士吉田市で開催された。運営主体は、南都留地域教育推進連絡協議会、富士・東部教育事務所、山梨県教育委員会であり、南都留の9教育委員会、教育長、校長会、教頭会等地域のすべての教育関係団体が含まれている。

フォーラムのテーマは、「子どもたちの教育は地域全体で担う」であり、サブテーマは「みんなで育む地域連携・地域交流」である。テーマ設定の趣旨は、子どもを巡る困難な課題を地域全体で考え、解決していこうとするものである。

当日は、富士吉田市立下吉田中学校、富士吉田市立下吉田コミュニティーセンター、南都留教育会館を会場にして、約330人の教育関係者やボランティア団体が集まった。始めに全体会があり、主催者として南都留地域教育推進連絡協議会の渡邊綱男会長が挨拶し次に来賓代表として堀内茂富士吉田市長が挨拶した。その後、下記の7分科会に分かれて研究協議が行われた。幼・小・中・高の連携、行政・地域団体・学校の連携等、まさに地域が一つになった教育フォーラムが行われた。

	分科会テーマ	本学からの 助言者	
第1分科会	幼稚園・保育園・小学校部会	～なめらかな接続～	筒井潤子
第2分科会	小学校・中学校部会	～地域連携によるキャリア教育～	金山光一
第3分科会	中学校・高校部会	～地域が未来をつなぐ～	西本勝美
第4分科会	小・中・高児童生徒会部会	～つなげて広げる～	宮下 聡
第5分科会	行政・諸団体・学校部会	～地域で支え、地域で育む～	亀田孝夫
第6分科会	特別支援教育部会	～わかり合い、高め合う～	—
第7分科会	P T A部会	～健やかな成長を育む～	品田笑子

ここからは、筆者が参加した第5分科会行政・諸団体・学校部会について述べる。この分科会では、富士河口湖町立富士豊茂小学校教頭山本成利先生と富士吉田市教育委員会生涯学習課青少年カウンセラー田辺守之さんが、地域の学校、保護者、地域、行政が一体となって、子どもを育む施策を進めていることを発表した。

1 「地域とともにある学校づくり」 ～学校・家庭・地域が一体となって子どもを育む～

発表 富士河口湖町立富士豊茂小学校 教頭 山本成利

富士豊茂小学校は、富士山の西麓の戦後入植の開拓地にある学校で、『何はなくてもまず学校を』という当時の父母や地域の学校に寄せる熱い思いや期待を背に、昭和23年に手づくりの学校として誕生した。その後、地区の方々の努力により、歴史と伝統を誇りつつ、地域住民の教育文化の中心として、心のよりどころとして尊ばれている。地域住民にとっては、『私たちの学校』という意識が、他の地域よりも強い。現在、全校児童26名で、「子どもたちが自

分で考え、行動できる大人に成長する」ように、学校や家庭・地域で連携して取り組んでいる具体例を発表した。①PTCA活動。PTAに地域住民が加わった「親と教師と地域住民の会」である。地域住民が、学校教育に外側から支援をするだけでなく、地域の子どもたちは地域で育てるという「共育」の気持ちを大切に、学校（児童・教職員）・家庭・地域の三者が、子どもの教育について緊密に連携した組織である。毎年、学校前花壇やまちなみ花壇の花植え、除草など学校や通学路周辺環境整備活動を行う。②秋季大運動会。学校、保育所、区、育成会、地域の消防団、中学生（卒業生）などが協力して、合同で秋季大運動会を実施している。前日準備、当日準備、運営、片付けなどを各種団体と合同で行う。児童、保育児が行う種目の他に、一般参加の種目、育成会の種目、高齢者対象の種目、消防団の種目などが行われ、地域をあげた運動会となっている。児童が一生懸命に取り組む姿を地域の方々に見て頂く良い機会となっている。③地域総合防災訓練。区・学校・保育所・消防団・各種団体が協力して行う総合防災訓練となっている。訓練の内容は、消防団による消防車での放水訓練の見学、消火器を使った消火訓練（高学年は実際に消火器を使用）、三角巾を使った応急救助法（全校児童が体験）、炊き出し訓練等を地域の方々と合同で行った。この総合防災訓練に参加することで、児童には「自分は地域の一員」という自覚を持たせ、地域とともに行動する意味を、児童が理解する機会と捉えている。全国学力・状況調査で、「自分には、よいところがあると思う」という自己肯定感を問う調査結果が、本校児童は山梨県平均を超えている。これは、地域の方々と様々な場面で接すること、ともに活動することで、自己肯定感も培われているのではないかと考えている。今後も、日頃からの学校・家庭・地域のかかわりを大切に、目指す児童像の実現のために、地域に開かれた学校づくりに教職員全体で尽力していきたい。

2 『わくわく子ども教室』 ～子どもたちの笑顔のために～

発表 富士吉田市教育委員会生涯学習課 青少年カウンセラー 田辺守之

富士吉田市では、平成20年に富士小学校に「わくわく教室」を開室し、平成24年に下吉田第一小学校に「わくわく教室」を開室している。この「わくわく教室」は、共働き家庭の「小1の壁」を打破するとともに、次代を担う人材を育成するため、全ての児童が放課後等を安全・安心に過ごし、多様な体験・活動を行うことができるよう、一体型を中心とした放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）及び地域住民等の参画を得て、放課後等に全ての児童を対象として学習や体験・交流活動等を行う事業（放課後子ども教室）を、文部科学省と厚生労働省が協力して計画的に整備等を行うとした「放課後子ども総合プラン」に基づくものである。

富士小学校の「わくわく教室」には、1年生16人、2年生17人、3年生14人、4年生20人、5年生5人、6年生1人の計73人が参加している。下吉田第一小学校の「わくわく教室」には、1年生11人、2年生8人、3年生13人、4年生8人、5年生11人、6年生1人の計52人が参加している。毎回の参加者は、申込者の8割ほどである。主な活動内容は、宿題の時間（45分から1時間）、スポーツ・工作・読書・読み聞かせ・遊びの時間・異年齢集団づくり等（45分から1時間30分）である。特別教室として、素麺流し・キューピー工場見学と恩賜林公園遠足・宿題とスイカ割り・三つ峠登山・昆虫採取・化石採集・三湖台ハイキング等を実施している。「わくわく教室」に対する児童アンケートには、ドッジボール等で先生と遊んだことが楽しかった。みんなと仲良くすることができて良かった。等と書かれ、教室に来る

ことを楽しみにしていることが伺われる。保護者アンケートには、他校児童とのふれあいや地域を越えた保護者交流が図れた。子どもたちは、サポーターと遊ぶことを楽しみにしている。兄弟が少ないので、異年齢の子ども同士の交流や大学生とのふれあいを期待している。等とあり、「わくわく教室」の目的である「放課後等を安全・安心に過ごし、多様な体験・活動を行う」が達成されている。

課題としては、「わくわく教室」へのニーズは高いが、空き教室の確保、安全指導員の確保が難しい。学童保育との連携統一や、学校との連携協力などの将来の有り様を描くことが大切である。人的にも、内容的にも、地域・保護者と連携した運営を模索していくことが必要である。安全確保の重要性と難しさなどがある。

田辺守之さんは、青少年カウンセラーの立場から、『まとめ』として次のように述べている。少子化・地域の衰退が懸念される時代となり、子どもたちは明日の地域を担う「地域の宝」である。子育てを応援し、暮らしやすい地域を作り出すことは行政や地域社会の大きな課題であり、目標である。地域社会の自治の力や人材を活用し、学校の持つ資源を活用し、保護者の子育てを応援していくことについて、行政の果たす役割は大きい。多くの課題はあるが、各部署の枠を超え、国・県との連携協力を図り、この事業を進めていきたい。

南都留地域には、教職員・保護者・地域、さらに行政が加わり、教育四者として協力して、「子どもたちの幸せ」のために学校教育に取り組んできた歴史がある。この南都留地域教育フォーラムも、そのような歴史の積み重ねを基に、関係団体がそれぞれの活動を交流し合い、より良い活動を模索していくことが重要である。今回、第5分科会で発表された富士豊茂小学校の「学校・家庭・地域が一体となった教育」は、小規模校の特性を活かした。

教育活動であり、「学校とは何か」を教職員・保護者・地域に今一度見つめ直す機会を与えてくれた。また、富士吉田市の「わくわく教室」は、都留市では「放課後子ども教室」として5つの小学校区で実施されており、地域の保護者や住民が運営に携わり、都留文科大学生もその運営に協力している。これは、地域に密着した本学ならではの学生の活動である。教員を目指す学生が、子どもたちの体験活動に指導者・支援者として携わることは、子ども理解や教員としての認識と自覚を高めるためにも大変意義のあることである。また、本学学生は、市内小中学校でSATとして活動しており、学校・家庭・地域が一体となった学校現場を体験することは、将来教師となる学生の教育観形成に良き影響を与える。今後、学生がこれらの活動に積極的に参加するよう啓発していきたい。

今回、南都留地域教育フォーラムに参加した教職員や保護者、地域・行政の方々、教育関係者が提起された課題について熱心に論議する姿から、学校教育が解決困難な課題を抱えている中、「子どもたちの幸せ」のために真剣に協力して取り組んでいることが伝わり頭の下がる思いである。南都留の小学校教育に携わってきた一人として、南都留地域教育フォーラムのテーマ「子どもたちの教育は地域全体で担う」をもとに、学校・家庭・地域・行政・教育関係者が協力し、「健やかな児童生徒の育成」のために南都留の学校教育がなお一層前進することを願ってやまない。

(文責：亀田孝夫)

IV-2. 都留市放課後子ども教室事業

1. 「都留市放課後子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成16年度）および「地域教育力再生プラン」（平成17・18年度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども協育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会生涯学習課が事務局を担って実施している事業である。平成27年度は5つの小学校区（東桂、宝、谷村第二、旭、禾生第二）を中心に、学校の体育館やグラウンド、図書室等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの活動を行っている。

2. 今年度の活動状況

地域交流研究センターでは、教育委員会からの依頼を受けて、活動指導員として協力してくれる学生を募集している。昨年度までは、学生が希望する活動に申し込む方法だったが、この方法では申し込みの多い活動とまったくない活動に分かれてしまい調整が難しかった。そこで、今年度からは、まずセンターが活動指導員として参加できる学生を募集し、教育委員会が募集の際に確認した特技や趣味から適する活動に参加をお願いする方法を取ることになった。

今年度は38名の学生が活動指導員として子ども教室事業に参加し、38の活動で子どもたちをサポートした。

3. 来年度の活動について

今年度から募集方法を変更したことにより、延べ参加学生数は70名から88名と大きく増加した。来年度もこの方法で募集を行う予定である。

また、来年度からは禾生第一小学校の小学校区が新たに増えることになっている。

（文責：事務局）

平成27年度放課後子ども教室学生参加活動一覧

No	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	参加学生数
1	6月10日(水)	与繩こども教室の看板を作ろう！&自由遊び	与繩営農指導センター	2
2	6月17日(水)	フットサル	体育館	1
3	6月24日(水)	フットサル・ボール遊び	旭小体育館	1
4	7月1日(水)	【絵画】増田誠展にむけた絵画の制作	東桂コミュニティーセンター	1
5	7月8日(水)	働く馬とあそぼう！！	宝（平栗）	1
6	7月15日(水)	ゲートボール（1,2年生）	東桂小グラウンド	1
7	7月15日(水)	自由遊び！	グラウンド	2
8	7月24日(金)	花の苗の観察、桂川・鹿留川観察	畑、古渡・宮下方面	1
9	7月24日(金)	ハコレーション～段ボールコラージュの制作～	宝小体育館	2
10	7月27日(月)	ハコレーション～段ボールコラージュの制作～	宝小体育館	2
11	7月29日(水)	巡回バスに乗って遠足&川遊び	学校⇄戸沢	1
12	7月30日(木)	しゃぼん玉で遊ぼう！！	与繩営農指導センター	3
13	8月3日(月)	【絵画】増田誠展にむけた絵画の制作	東桂コミュニティーセンター	2
14	8月3日(月)	ビーズでプレスレット作り	多目的ホール	3
15	8月4日(火)	将棋	多目的ホール	1
16	8月10日(月)	【工作】木切れで自由に作品作り	東桂コミュニティーセンター	2
17	8月10日(月)	つるっ子探検隊！レッツゴー！ぼくらの川の大冒険 (都留文科大学アウトフィッターサークル)	やすら園・川	13
18	8月18日(火)	【絵画】増田誠展にむけた絵画の制作	東桂コミュニティーセンター	2
19	8月19日(水)	けん玉を作って遊ぼう	多目的ホール	2
20	8月20日(木)	【手芸】りんごのコースター作り	東桂コミュニティーセンター	2
21	8月21日(金)	つるっ子探検隊出動！都留文大のお兄さんお姉さんと遊ぼう！	月待ちの湯の公園	9
22	8月29日(土)	大根の種まきとさつまいもの探り堀り・自然散策	畑、夏狩方面	1
23	9月24日(木)	お弁当を持って公園にでかけよう	谷二小～戸沢	2
24	10月2日(金)	↑↑(^▽^)^↑↑ たき火でするめを食べる？！	禾二小グラウンド	1
25	10月18日(日)	【制作】竹制作	東桂コミュニティーセンター	2
26	10月21日(水)	自由遊び	多目的ホール	3
27	10月28日(水)	自由遊び	旭小校庭	1
28	11月20日(金)	↑↑(^▽^)^↑↑ 小形山城を作る！	禾二小グラウンド	4
29	12月3日(木)	宝の山の番長とたき火	宝小グラウンド	2
30	12月25日(金)	クリスマス会	与繩営農指導センター	2
31	1月6日(水)	【工作】万華鏡を作ろう！	東桂コミュニティーセンター	2
32	1月6日(水)	指あみマフラーを作ろう！	多目的ホール	2
33	1月6日(水)	凧を作って、凧上げをしよう	図工室、グラウンド	1
34	1月7日(木)	凧を作って、凧上げをしよう	与繩営農指導センター	3
35	2月3日(水)	自由遊び	旭小体育館	3
36	2月5日(金)	↑↑(^▽^)^↑↑ 雪遊び・グラウンドで遊びを作る！	禾二小グラウンド	1
37	2月10日(水)	昔の遊び	多目的ホール	2
38	2月17日(水)	自由遊び	グラウンド	2
参加学生数 38名 延べ参加学生数 88				

IV-3. 文大ボランティアひろば

1. 文大ボランティアひろばとは

文大ボランティアひろば*（通称：ぼらひろ）とは、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との話し合いの中から生まれた「ボランティアをとおして交流できる場」のことである。平成20年度から1カ月に1回のペースで開かれており、本学のボランティアサークルを中心に、地域交流研究センターと社会福祉協議会の職員やボランティアの協力を呼びかけたい地域の方が参加して、緩やかな連絡協議会的な会合を行っている。

会合の内容は、前回の会合以降の各サークルからの活動報告、地域交流研究センターや社会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、各団体からの協力呼びかけや新事業の提案、地域の方からの直接のボランティア募集の告知などが中心である。社会福祉協議会にとっては、とりわけ大学生対象のボランティアニーズを持ち込む「窓口」ができたことが大きく、各サークルにとっては、相互の活動に触れて刺激を受け合えることや、これらを通じて活動が活性化されることが大きい。ただし、ボランティアを行う際には次の点に気を付けなければならない。

- ① ボランティアはあくまで自発的なものでなければならず、大学やセンターが押し付けるものではない。
- ② それぞれのサークルの個性や独自性を最大限に尊重し、新たな負担をかけない。
- ③ 活動の蓄積のある既存サークルこそが新しい取り組みの中核である。

平成27年度の文大ボランティアひろばは、8月・9月・2月・3月を除く計8回開催した。

2. 学生サークルについて

ぼらひろには、「ボランティアサークルつくしの会」、「Σソサエティー」、「つる子どもまつり事務局」、「いこいのひろば支援サークル IKI」などの学生サークルが参加しており、各サークルの主な活動は次の通りである。

つくしの会では、障がい者施設の訪問や献血推進活動などの福祉系のボランティアを中心に、地域に根ざした活動をしている。Σソサエティーでは、文大周辺の道路・ゴミ捨て場で朝のゴミ拾い活動を定期的に行っている。つる子どもまつり事務局は、毎年5月に行われるつる子どもまつりの計画・実施を行っている。IKIは、いこいのひろば*を支援するサークルで、障がいのある方や地域の方との交流を深める場を企画・運営している。いこいのひろばは、文大ボランティアひろばの中で、福祉施設の職員の方から「障害のある方が学生や市民と交流できる機会をつくってほしい」との声をを受けて平成22年10月にできた交流の場である。

これらの学生サークルは個々の活動以外に、協働で取り組む活動も行っている。それが世界の子どもたちにワクチンを届けるためのペットボトルキャップの回収である。大学内には回収ボックスが設置されており、各サークルが当番で回収し、ぼらひろ開催時に都留市社会福祉協議会の職員に渡している。

* 文大ボランティアひろば及びいこいのひろばについては、地域交流研究年報第7号に詳しく掲載されている。

3. 地域交流研究センターにおけるボランティア募集

地域交流研究センターでは、主にサテライトを窓口としたボランティア募集も行っている。今年度は、お茶壺道中の参加や農作業ボランティア、地域のお祭りでの運営補助などの依頼が計12件あり、学内の掲示板・学内サイト・ぼらひろを中心に参加したい学生を募集してきた。人の出入りが多い1号館に、新たなボランティア告知用の掲示板を設置したことで、ぼらひろに参加していない学生にも周知することができた。

4. 今後の課題

ぼらひろは、平成20年度から継続して開催されているが、現在は開催の案内が毎回参加している団体にしか告知されておらず、誰でも参加できるための配慮がなされていないようなので、今後は地域交流研究センターのホームページでお知らせするなどその周知方法を検討する必要がある。

(文責：事務局)

IV-4. 地域交流研究センターサテライト

1. 地域交流研究センターサテライトについて

平成25年度に都留市まちづくり交流センター内に都留文科大学地域交流研究センターのサテライト（分室）が設置された。サテライトでは地域の方々に大学をより身近に感じてもらうことや、大学と市民との交流促進を図ることを目的に活動している。

2. 今年度の活動状況

大学と地域をつなぐ窓口として、ボランティアの募集や地域の講演会への講師派遣依頼、学生のイベント開催の支援などを行っている。平成27年度は、地域美術教育分野の展示会「てん・てん」をサテライトを通して開催したり、谷村地域協働のまちづくり推進会の要望を受けて、落語研究会とかるたサークル合同の地域交流会を開催した。また、まちづくり交流センターでは「暮らしに役立つみんなの広場」と題したミニ講座を定期的に開催しており、本学の学生にも講師として協力をしてもらった。

今年度は新たな試みとして地域交流研究センターブログを開設し、サテライトとしては地域のイベントに参加する学生たちの活動取材し掲載した。展示会や地域交流会の様子はこのブログで紹介されている。このほかにも大学を市民に周知するための活動として、大学のイベントの案内やポスターをまちづくり交流センターに掲示したり、地域交流センター通信、フィールド・ノート、大学案内の配架を行った。また、「地域協働のまちづくり推進会連絡会」など、地域の方が多数集まる集会やイベントに積極的に赴き、サテライトの設置と役割について説明をした。

一方で、今年度まで都留市広報誌の都留市まちづくり市民活動支援センターが担当する『協働通信』の取材のお手伝いをしてきたが、今後はそのセンターがすべてを担うこととなった。

なお、サテライトの今年度の活動の記事が「地域交流センター通信27号」43ページから45ページの3ページにわたって掲載されている。

3. 来年度の活動について

サテライトの存在をもっと多くの方に知ってもらい、広く活用してもらうために、引き続きサテライトの周知活動を行う。また、学生・市民から寄せられる相談・依頼への柔軟な対応を目指し、学生と市民との交流の場を増やす活動を行う。

(文責：事務局)

IV-5. 文大名画座

文大名画座は、平成18年度から地域貢献活動の一環として実施しており、本学教員を広く市民の皆様を紹介するとともに、その教員がおすすめする映画を本人の解説を踏まえて行う上映会のことである。今年度は都留文科大学創立60周年の特別事業として、映画の上映会とその原作者のトークイベントを開催した。開催状況は次の通りである。

平成28年度第1回文大名画座 『ツナグ』上映会&辻村深月トークイベント

日 時：平成27年6月27日(土) 12:30~16:30

場 所：2号館2101教室

上映作品：『ツナグ』

原 作 者：辻村深月氏

コーディネーター：国文学科 古川裕佳教授

参 加 者：188名

平成28年度第2回文大名画座 『あん』上映会&ドリアン助川氏講演会

日 時：平成28年3月18日(金) 17:00~20:00

場 所：2号館2101教室

上映作品：『あん』

原 作 者：ドリアン助川氏

参 加 者：137名

共 催：比較文化学会

なお、第1回文大名画座でコーディネーターをご担当して頂いた古川裕佳先生による記事が「地域交流センター通信27号」40ページに掲載されている。

また、第2回文大名画座については、当日の様子が地域交流研究センターブログで紹介されているが、参加者の感想については本誌に掲載する。

私にとってハンセン病とは、ニュースや新聞紙面のなかの出来事でしかありませんでした。それは「らい予防法」という法律の下、元患者さんの方々と誠実に向き合っただけでなかったこの国の必然でもあり、更に言えば、そうした社会に無意識に加担してきた、私たち一般の無関心の集積のようにも思われ、私は二重に胸が痛みます。

その痛みを忘れてはならないという警告のように、最近、新たに元患者の家族ら500余人が国へ提訴したこと、療養所の4人に1人が認知症で、高齢化が深刻であることなどの新聞記事を目にしました。

けれども、「あん」はハンセン病差別に関する反発や告発と言ったメッセージ性はなく、むしろ、病気にせよ、健康にせよ、私たち一人ひとりの「生きる意味」について、元患者である徳江自身の生き様を通じて、穏やかに問いかけてきました。

それは、社会的に「必要ではない」と断じられ、囲いのなかで生きることを余儀なくされた人間であってさえ、いかにして「囲いを越えたところ」を、「生きる意味」を持ちえたのかという、21世紀現在でもなお古くて新しい、普遍的なテーマと言えると思います。

ドリアン助川さんご自身、96年のらい予防法廃止をきっかけに元患者さんたちの生き様を想い、小説を書きたいと思い立ったと言います。以来、ロックバンドや渡米生活を経て、道化師、作家に至ったこと、病気がもとでお酒を止められ、苦手だった甘いものを気づいたら手にとっていたことをきっかけに、パティシエの小説を書こうと製菓学校まで通い、あん作りを習得されたこと、道化師としてのライブに來られた元患者さんとの交流を持ったことなど、実に20年もの間、書きたいという志の灯を絶やさなかったそうです。

だからこそ、それらのご経験を凝縮し昇華された「あん」の誕生は、奇跡ではなく、大きな必然であると心から感服しました。

そうして、即時的に結果を要求する昨今の乾いた風潮とは対極の、歳月と愛情をかけゆつくりと育んでいく行為の本来の豊かさを再認識させられ、不惑を控えてもおお模索の途上の身である私としては、大変な勇気を頂きました。徳江が小豆一粒一粒と向き合ってあんを炊いていたように、私も丁寧に日々と向き合っただけでなければと思いました。

この場をお借りして、この度の貴重な企画に携わってくださった方々に、そして、ドリアン助川さんに深く感謝申し上げます。
(海野 剛)

(文責：事務局)

IV-6. 学級づくりの向上をめざす実践講座

平成27年度は7回にわたって開催された(参加者はのべ134名)。

- ・第1回 4月25日(土) 渡辺幸之助(秋山中学校)
SNSに負けるな! コミュニケーションに満ちた学級づくり
- ・第2回 5月23日(土) 金勝武鑑(富士学苑中学校)
子どもたち、この素晴らしきもの
- ・第3回 6月27日(土) 長谷川俊一(池田小学校)
班やリーダーの意味は何? 原則から今抱える悩みまで
- ・第4回 7月25日(土) 渡邊克吉(吉田小学校)
対話と話し合い活動を通して安心感のある学級づくりを

- ・第5回 9月26日(土) 芦澤稔也(増穂中学校)
自主学習ノートの挑戦! 学力保障から信頼関係づくりまで
- ・第6回 10月24日(土) 清水佳子(禾生第二小学校)
子どもを信じ、認めることから学級づくりが変わる
- ・第7回 11月28日(土) 三浦 淳(都留第二中学校)
Q-U学級満足度90%以上を目指す学級づくり～学級担任の夢と理想～

毎回、現職の教員のみならず、本学の学生も参加している。学生にとっては、大学の講義だけでは分からない学級づくりの具体的な方法や事例を学べるだけでなく、現職の先生方とも身近に交流できるということが大きな魅力となっている。この講座がきっかけとなって、卒業論文の調査研究に協力していただいたというケースもある。

平成28年度も、7回にわたって開催される予定である。

- ・第1回 4月23日(土) 金勝武鑑(富士学苑中学校)
主権者教育のできる学級をつくり出せる教師集団に
- ・第2回 5月28日(土) 渡邊亜希彦(双葉中学校)
合唱活動の力を学級づくりから教科学習にまで生かす試み
- ・第3回 6月25日(土) 小尾 綾(明野小学校)
ともに学び関係性を築ける学級づくり～特別支援の観点から
- ・第4回 7月23日(土) 高村文秀(東桂中学校)
「説得ではなく納得」担任・部活顧問として学んだことから
- ・第5回 9月24日(土) 上杉春樹(竜王東小学校)
対人関係の問題解決能力を養うことに視点をおいた学級づくり
- ・第6回 10月22日(土) 小林恵子(竜王西小学校)
日々できることをちょっとだけ増やしてみませんか～児童理解を基本に～
- ・第7回 11月26日(土) 鶴田 心(総合教育センター指導主事)
「生徒主体」につなげる信頼関係をどう築いてきたか

(文責：鶴田清司)

V. 地域交流研究教育プロジェクト

V-1. 田んぼクラブ

- ・西本勝美（代表者・初等教育学科教授）
- ・畑 潤 （社会学科非常勤講師）

1. 本活動の経過と活動概要について

「田んぼクラブ」は、2005年度に、都留市職員の勧誘・仲介を受けて、都留市農業委員会および山梨県富士・東部農務事務所の協力のもとに始まった活動で、本学近くの水田（約6畝）で学生と教員の有志が稲作に取り組む、今年度（2015年度）で11年目となる活動である。

当初の2005年度～2007年度の3年間は農務事務所のはからいで山梨県の「ふるさと水と土基金」の助成を受け、続く2008年度・2009年度の2年間は「環境教育GP」の一環に位置付けられ、活動が大いに発展した。そして、2010年度からは、本学の「環境ESDプログラム」との関連（実習系への位置づけ）もあり、本学地域交流研究センターの「地域交流研究教育プロジェクト」に申請し採択されている。今年度は、プロジェクトとしての第2期3年目（通算6年目）であった。

2008年度以降は農業委員会から自立し、「基本的にはすべての作業を自分たちでやる」ことを目標として、それまで市役所の農業リーダーや農業委員会に一任していた種籾の消毒・催芽といったところから、播種、田植え準備、水入れ、田植え、除草、稲刈り、はぎ掛けはもちろん、夏期休業中の水見も曜日毎の当番制でやり切っている（代掻き等のトラクター作業と、脱穀・精米はJA等に依託）。無農薬・有機質肥料の使用による有機栽培米への挑戦も一つの目的としている。

2010年度からは「学生主体」の運営が目指され、ほとんどの作業を学生のリーダーシップで進めることができるようになってきている。

2. 今年度（2015年度）の活動について

プロジェクト通算6年目となる今年度（2015度）の活動であるが、学生主体の農業系サークルとしての運営が定着し、学生組織としては、四代目の新学生代表と1名の副代表を置く形となった。

本活動の大きな特徴としては、2011年度から「水苗代」と「一本植え」に取り組んでいることが挙げられる。これは2011年度当初に、一代目の学生代表を中心とする学生メンバーからの発案がきっかけとなり、学生数名で長野県の農家に研修に行き、ノウハウを教わったうえでの取り組みである。

「水苗代」は、田の一角に周囲を堀で囲った床をつくり、直に種籾をまいて苗を育てる育苗法で、農村でもほとんど見られなくなった古い方法であるが、これに取り組むことで米づくりの全行程をクリアし、発芽や苗の生長のようす、稲の旺盛な生命力を実感することができる。一昨年度から、この水苗代の改良型として、木枠とブルーシートで浅いプールを作り、その中に播種した育苗箱を並べる方法を試みている。これは育苗中の雑草対策と、水管理の合理化のための改良であったが、水の不足や温度の過上昇が一気に致命的なダメージとなること、プー

ル内の水質が悪くなることなど、思いがけない困難も生じ、土（自然）と切り離れた環境で苗を育てる難しさを痛感することにもなっている（土とつながっていれば、さまざまな変化が緩衝される）。

また、昨年度は播種の時期が遅くなったことも一因となって、プール苗代の温度が上がりすぎ、発芽した芽がかなりの割合で枯死する事態となった教訓から、播種時期を早め、ビニールトンネルの代わりに白の寒冷紗を掛けるなどの工夫をしたことにより、苗の育ち具合は過去最高と言えるほどになった。

田植えは、上述のように2011年度から、田植機の場合よりも大きく育てた苗を、縦・横30cm間隔（尺植え）で1本だけ植える「疎植一本植え」という方法でおこなっている。稲は1本だけ植えても根元から分けつして20～30本に増える。通常の植え方（3～5本くらいを一個所に植える）ではわかりにくいのが、「一本植え」では1本が20本に、また「一粒が千粒」になると言われている稲の生態をはつきりとつかむことができる（一本植えを始めた当初、実際に収穫時に数えて「一粒が千粒以上」になることを確かめた）。これらの取り組みは、米づくりの工夫を知るという点でも、稲という作物を深く知るという点でも大きな成果を挙げている。

ただし、今年度は苗の生長は良好であったが、学生たちの日程調整から田植えの時期が遅くなり、田植え時には若干育ちすぎになってしまった。大きくなりすぎた苗は、必ずしも植えやすいわけではなく、むしろ田植え直後に倒れやすいこと、活着が遅いことなど、育ちすぎたがゆえの問題もあることがわかった。10年間の経験をもってしても、まだまだわからないことがたくさんあると痛感した。

次に、夏場の活動は毎日の水見と除草であるが、今年度も除草が徹底しておこなわれた。田植えの2週間後から出穂期まで数回、学生たちの主体的な除草作業が徹底しておこなわれたため、以前は大発生していたノビエをほぼ押さえ込み、代わって目立ってきたのは稲の生長に害の少ないコナギである（この雑草は除草剤をまかない水田に限って発生するとのことで、活動当初からの無農業栽培の成果の現れでもある）。無農業栽培のため、最初の1～2回は手押し式の除草機も併用してはいるが、除草作業は炎天下の重労働である。この労苦の多い作業を例年、学生主体でやりきっていることは、継続して関わりを持つ学生たちのなかに「自分たちの田んぼ」「自分たちの稲」という意識が芽生えてきたことを意味する。これは「農」という営みの本質に触れる部分であり、これまでの活動の蓄積・成果として高く評価できる。

秋の稲刈り、はぎ掛けまでは順調であったが、昨年度に引き続き、脱穀をどうするかが大きな課題となった。加えて今年度は、はぎ掛け期間に異常に雨が多く、脱穀のタイミングをはかるのもなかなか困難であった。一昨年度まで脱穀を依頼していた元市職員の方に再度依頼することになったが（昨年度は機械の故障のため依頼できなかった）、稲が湿っていたせいもあって、途中で機械が故障するというアクシデントに見舞われた。残りの脱穀をどうするか課題となったが、学生代表の市役所職員とのつながりを活かして、稲の運搬、脱穀とも、市民の方々のご協力を得てなんとか終了に漕ぎ着けることができた。こうした市役所職員や市民の方々との交渉・依頼はすべて学生代表を中心とする学生組織が主体的におこない、顧問的な立場の筆者（西本）は、いっさいタッチしていない。学生たちの行動力や都留市民とのつながりの強さを実感した場面であった。ただ、来年度以降も脱穀をどうするか抜本的な解決策は見出せないままである。

最後にもう一つ書き留めておきたいことは、10年にわたる無農業栽培の成果である。昨年

7月の地域交流研究センター運営委員会にて一昨年度の「田んぼクラブ」の活動報告をした際に、上述のようにノビエに代わってコナギが増えてきたという報告に対して、初等教育学科の別宮有紀子先生から、「私はコナギが大好きなのですが、田んぼクラブの田んぼにコナギが復活したことに感動しました。無農薬栽培を10年近く続ければ、コナギが復活することがわかりました」という発言があった。さらに、特任教授の北垣憲仁先生からは、「田んぼクラブの田んぼに行くと、トノサマガエルの鳴き声がします。都留市の他の場所では聞いたことがありません。トノサマガエルは山梨県では絶滅危惧種になっていますが、田んぼクラブの田んぼは、トノサマガエルが生息できる環境になってきているのだと思います」という指摘があった。筆者自身はそこまでの自覚はなかったのであるが、「田んぼクラブ」の10年にわたる活動が、絶滅危惧種が生息できる環境や生態系を回復させるところまで来ているという大きな「成果」を踏まえて、今後は学生メンバーともども、より自覚的・意識的な取り組みをしていきたいと考えている。

なお、2012年度から本学の「環境ESDプログラム」の「実習系」活動の履修（2年次～）が開始され、「田んぼクラブ」は同プログラムの「ナチュラルライフコース」の選択履修対象に位置づけられている。今年度は2名の学生が同プログラムの「実習系」として活動に参加し、年度末に実習修了証明書を発行した。

3. 来年度（2016年度）の活動に向けて

年末の時点で、来年度以降の活動継続の見込みが立ったため、「地域交流研究教育プロジェクト」に申請し、第3期となる3年間（2016年度～2018年度）の活動を採択していただいた。2016年度は、今年度副代表をつとめた学生が五代目の学生代表となり、新副代表とともに活動をリードすることになった。すでに現時点で播種、田植えが終了しているが、苗の育ち具合があまり良くなく（原因不明）、毎年のことではあるが、心配の種は尽きそうにない。

（文責：西本勝美）

V-2. 食育つる推進プラン

【2015年度活動報告】

「食育つる推進市民会議実施計画案」I～Vに基づき、以下の活動を実施した。

重点目標 I 朝食の欠食をなくしましょう

題材名：「早寝早起き朝ごはん」

日 時：2015年12月14日（月）

場 所：都留市立禾生第二小学校 学童施設「わんぱく教室」（都留市田野倉）

対 象：児童20名（1～4年生）

学生参加：8名

内 容：ゲームや紙芝居、エプロンシアターを取り入れながら、朝ごはんを食べることや栄養バランス良く食事をすることの大切さを伝えた。

重点目標Ⅱ 食事は楽しく取りましよう

題材名：「みんなで食べるとおいしいね」

日 時：2015年12月16日(水)

場 所：さくら保育園（都留市田野倉）

対 象：園児25名（0～5歳）

学生参加：9名

内 容：歌・踊り遊び、パネルシアター、野菜スタンプリレーを取り入れながら、一人で食べるより、皆と一緒に食べることの喜びを伝えた。

重点目標Ⅲ 生活習慣病の予防に努めましよう

題材名：「おやつのカロリーってどのくらい？」

日 時：2015年12月21日(月)

場 所：都留市立禾生第二小学校 学童施設「わんぱく教室」（都留市田野倉）

対 象：児童20名（1～4年生）

学生参加：8名

内 容：実際に様々なおやつのカロリーを調べながら、小学生が一日に食べてもいいおやつのカロリーについて認識を深めた。また、摂取したカロリーのエネルギーとして消費するための運動量について、実際に様々な運動をしながら体感し、カロリー過多とエネルギー消費のバランスによって、肥満になることを学んだ。

重点目標Ⅳ 正しい食の意識を身につけましよう

題材名：「バランスの良い食事ってどうするの？」

日 時：2015年12月28日(月)

場 所：都留市立禾生第二小学校 学童施設「わんぱく教室」（都留市田野倉）

対 象：児童20名（1～4年生）

学生参加：8名

内 容：そのまま料理カードを利用した釣りゲームを取り入れながら、3つの食品群のはたらきと分類を説明し、主食・主菜・副菜の理解を図った。また、ランチョンマットの上に自分で好きな料理カードをおき、バランスの良い食事を考え、グループ発表を行った。

重点目標Ⅴ 食文化をつなごう

題材名：視察研修（都留市内における農産物や特産品、加工食品について学ぶ）

日 時：2016年3月1日(火)

場 所：市内各所

教員参加：2名

内 容：午前 ①水掛菜栽培地（堀口様）

②ユニテック（株）ユニファーム事業部（代表取締役 野武一雄様）

午後 ③菊地わさび園

④谷村織物工業協同組合（理事長 高部駿三様）

訪問した時期が3月だったため、今年度のゼミ内において、活動報告を行った。学生たちと共に、新たな加工品を開発できるよう、アイデアを出し合った。

【来年度の活動計画】

来年度も「食育つる推進市民会議計画実施案」における重点目標Ⅰ～Ⅴの内容に基づき、学童や保育施設等において、パネルシアターや読み聞かせ、リズム体操等を通じた食育講座を展開する予定である。

また、都留市の特産品を生かした加工品の開発を学生が中心となり、行う予定である。

(文責：平 和香子)

V-3. 都留市十日市場・夏狩地区における桂川を中心とした水環境の経年変化の把握

- ・内山美恵子 (代表者・COC推進機構特任教授)
- ・中井 均 (初等教育学科教授)

1. はじめに

本研究は都留文科大学地域交流研究センターが設置する地域交流研究教育プロジェクトの一つであり、2015～2017年度実施分として採択された。

都留市十日市場周辺は富士山に育まれた清涼な湧水が生じる地域として知られ、本地域では古来よりその恵みを受けた生活を営んできた。しかしながら、地層中のどのような経路を通じて地下水が湧水しているのか、基盤岩と溶岩中の地下水の混合があるのか、1年を通じて湧水量や水質がどのような変化をするのか、気象に連動して水環境が変動するのか、など不明な点が多い。そこで本プロジェクト研究では、湧水の年単位の水環境の変化を捉えることにより十日市場・夏狩湧水群の将来予測を行うための基礎資料を得ることを目的として、十日市場・夏狩地区の湧水の水質調査および流量観測を実施している。本論では、これまでに得られた2015年度分の観測結果の概要を報告する。

2. 研究方法

まずは予備調査により、湧水地点・湧水量・周辺の状況などを確認した。湧水地点はこれまで知られているとおり、新富士火山富士宮期(津屋(1968)の新富士旧期溶岩)の噴出物である桂溶岩流(高田ほか, 2014)の末端において、古富士泥流と溶岩との境界部から湧出している。湧水地点は十日市場・夏狩地区を中心に数多く存在しており、2008年6月に環境省により平成名水百選の一つとして認定された。調査の結果、常に湧水があつて涸れないこと、大雨などによって観測施設が流されないこと、湧水量が多すぎず計測するのに適切な量であること、観測地点にアクセスしやすいこと、などを考慮して、十日市場にある永寿院さんにご協

力をいただき、流量連続観測を実施している（図1）。

観測は自記水位計にて連続観測を実施し、流量の実測から水位流量曲線を求めて、水位を流量に換算する。観測システムは永寿院のお堂の裏の流路に有孔塩ビ管を固定し、その中に水圧式自記水位計を設置して（図2）、2015年10月9日から測定を開始した。測定間隔は2015年10月9日～2016年4月6日までは10分間隔、それ以降は60分間隔である。流量は建設省河川局が定める浮子測法を用いて観測している（社団法人日本河川協会編，2004）。

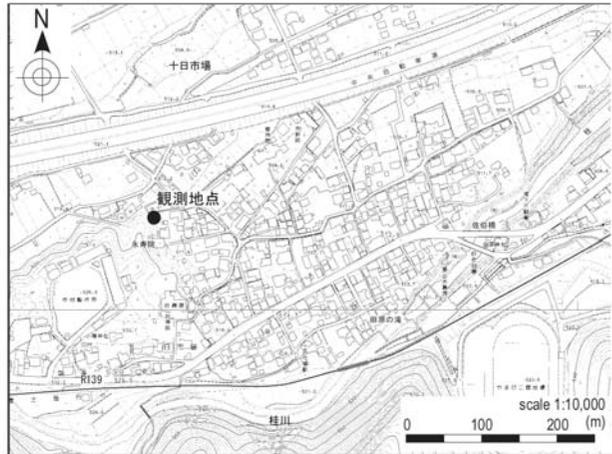


図1. 観測地点位置図（都留市都市計画基本図1・4を使用）

流量は建設省河川局が定める浮子測法を用いて観測している（社団法人日本河川協会編，2004）。浮子測法とは浮子を流して流速を求め、水深を複数個所観測して流水断面を求め、流速と流水断面を乗じて流量を求める方法である。



図2. 水圧式自記水位計設置状況

今回の観測地点は流路幅が約80cm、水深が10cm前後であるため、流線は1本とし、割り箸を用いて作成した棹浮子が2m区間流下するのにかかる時間を10～20回測定した。その結果から最大値と最小値を省いた平均流速を計算し、これに校正係数0.85を乗じて流速を求めた。流量観測は初等教育学科自然環境科学系地学ゼミの学生に手伝ってもらって、月に1～2回実施した。また、あわせて簡易水質（水温・水素イオン濃度指数・電気伝導率）の現地観測と、水質分析用の試料を採取している。

3. 観測結果

本地点ではおよそ16m区間の桂溶岩流から湧出している湧水を観測している。2015年10月～2016年3月の湧水量は、暫定換算流量で700～1160 L/minの地下水が湧水していることが判明した。

1日における湧水量の短期的変動は、60分周期で増減を繰り返す傾向が見られた。また、午前中は水量が安定しているが午後全体として増加あるいは減少する日が多く認められた。一般的にこのような変動パターンは使用中の井戸周辺の地下水で認められることが多いが、本地点における変動要因は現在調査中である。

湧水量の長期的変動は、2015年10月から増減を繰り返しながら全体的に減少を続け、2016年1月下旬から2月上旬で湧水量が最も少なく、その後増加を続けている。これは湧水量の年

変動を捉えていると推察されるが、さらに観測を継続し少なくとも1水文年のデータ取得後に判断したい。また、水温の長期的変動は2015年12月中旬ころまでは13.5℃でほぼ安定しているが、その後徐々に低下し、2016年3月31日時点ではまだ安定していない。

4. まとめと今後の予定

都留市十日市場地区において湧水量の連続観測を行った。その結果、渇水期である冬季でも安定した湧水が認められるが、その湧水量は一定ではなく年変動がある可能性が捉えられた。また、1日の中でも湧水量が増減していることが判明した。

今後はこれらの要因を考察する基礎データとして、本地域の降水量の収集、および周辺の井戸分布を含めた水利用形態の調査を実施する予定である。また、水質面からもこれらの変動を補足するため、採水資料の水質分析を進め、統括的に水文環境を明らかにする計画である。

(文責：内山美恵子)

引用文献

- 社団法人日本河川協会編（2006） 第3章 流量調査, 改訂新版 建設省河川砂防技術基準（案）同解説・調査編, 山海堂, 35-60, 591pp.
- 高田 亮・山元孝広・石塚吉浩・中野 俊（2014） 富士火山地質図 第2版(Ver.1), 地質調査総合センター研究資料集, no.592, 産総研地質調査総合センター.
- 津屋弘道（1968） 富士山地質図（5万分の1）, 富士山の地質（英文概略）, 地質調査所, 24p.

(付) 2015 (H27) 年度 地域交流研究センター担当教員

鳥原 正敏	初等教育学科教授	地域交流研究センター長 フィールド・ミュージアム部門担当 地域美術教育担当
別宮有紀子	初等教育学科教授	フィールド・ミュージアム部門担当
杉本 光司	情報センター教授	地域情報教育担当
福島 万紀	社会学科講師	暮らしと仕事部門担当
堤 英俊	初等教育学科講師	地域特別支援教育担当
山口 博史	COC推進機構准教授	
品田 笑子	COC推進機構特任教授	地域教育相談室担当
北垣 憲仁	COC推進機構特任教授	地域交流センター通信編集長 フィールド・ミュージアム部門担当
内山美恵子	COC推進機構特任教授	暮らしと仕事部門担当

2015 (H27) 年度 地域交流研究センター運営委員会委員

別 宮 有紀子	広報委員長		
上 原 明 子	初等教育学科	佐 藤 明 浩	国文学科
奥 脇 奈津美	英文学科	高 橋 洋	社会学科
分 田 順 子	比較文化学科	西 本 勝 美	環境ESDプログラム 運営委員会
齋 藤 浩 稔	経営企画課長	高 山 みどり	企画広報担当
池 谷 廼 久	(前期) 市民代表 (都留市まちづくり支援センター長)		
太 田 光 男	(後期) 市民代表 (都留市まちづくり支援センター長)		

2016年9月16日 発 行

編 集 者 都留文科大学地域交流研究センター

発 行 者 都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1
電 話 0554-43-4341

印 刷 所 有限会社 印刷エトリ
〒402-0052 山梨県都留市中央2-7-24
電 話 0554-43-3451
